
マイスイートホーム

touyou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マイスイートホーム

【Nコード】

N9887C

【作者名】

touyou

【あらすじ】

第十二話「愛はリトルレインなのだ」後半恋愛エンターテイメント国家／民族ノンフィクション実話系社会問題現代旅行／旅など様々な話題を、独身男と桃ちゃんがつれづれに話してゆきます。一話ごとに完結しています。

第一話「伊東美咲は真面目です」

昔、風俗で金を稼いで、今は安売り王のレジ係をしながらつましく暮らしている桃ちゃんが、「伊東美咲の演技がいいよね」と言った。

「あの一本調子の人だろ。セリフ回しが下手だ」と俺が言うと、「その一本調子のしゃべり方がいいのよ。伊東美咲はいつでも伊東美咲なの。だから大好きなの」

と桃ちゃんはおっしゃった。

桃ちゃんは、俺に比べたら人生設計をしつかり考えていて、中学を出たとき、三十までは性病にかからずに真面目に、男をしごいて、「磨き」をかけてやり、そのサービスにふさわしい労働対価を得て、貯金をして、三十以降は淡々と安月給に甘んじながら、貯金を年に何回か、少額を下ろしながら小市民として生きるという計画を立て、今はめでたくその計画を達成して、妙な男に引つかかるでもなく、市井の隅で地道に生きて、週一回のルネッサンスでのエアロビを欠かしたことのない三十七の女性。俺は、四十の独身男。安月給だが「まあいいか」と生きる気力などなく、ドラマ「トリック」をテレビ版から劇場版までDVDをすべてを持つているのが、唯一の自慢という人間である。

いい年こいて、桃ちゃんと俺は電話友達で、たまにいく寿司屋の常連である。桃ちゃんは月に十回に行くのだが、こっちは金がないから、月に五回の日もあれば、月に一回の日もある。桃ちゃんはおごってやるというのだが、「女にはおごらせられない」といつでも断っている。だから自然、桃ちゃんの携帯に電話して、家にいることを確認したら、携帯を切り、固定電話でこちらから掛けるのである。

話す内容はとりとめもないことで、お互いに論理性などなく、

何の話に飛んでいくかはその日の気分次第。

今日だって、なんで伊東美咲の話が桃ちゃんから出たのか、書いていても思いだせないのだ。ただし、「その一本調子のしゃべり方がいいのよ。伊東美咲はいつでも伊東美咲なの。だから大好きなの」という言葉には反論したくなる要素が秘められていた。

それは俺が、秋吉久美子のファンであつたからだ。

一本調子のしゃべり方なら秋吉に一日の長がある。ポツと出の伊東とは違い数十年の「一本調子」なのである。

「なら秋吉久美子も好きだろ。秋吉久美子はいつでも秋吉久美子って演技を、あの一本調子のセリフ回しで見事にやってるもんな」

俺は自信を持って桃ちゃんにそう言った。

あられを食っているのかシャキシャキとかむ音を電話口でさせながら、

「あー、あの人ね。あの人だめよ」

と軽いゲップの音をさせて言った。

「何で」

「真面目にしゃべってないから」

「えっ」

「秋吉久美子は真面目さが伝わらないの。何か醒めていて、かわいくて、でも小ばかにしたような顔をたまにして、うん、真面目さが足りないの。伊東美咲にはそれがあるの。メタボンも「めぞん一刻」でも見なさいよ」

ちなみにメタボンは俺に桃ちゃんがつけたアダ名である。

俺からみたら、秋吉久美子は役柄を自分なりに消化してその上で、独特の虚無感を漂わせようとしていると思っていたのだが、桃ちゃんにいわせれば、一言、「真面目にやれだったのだ」。

人はそれぞれ、自分の心の範囲で周囲の対象を認識していく。そのとき対象の評価の基準を持っている人は強い。

桃ちゃんの「真面目か否か」もくだらぬ時間など要する必要もなく、見たままに一瞬で分かることである。

俺は秋吉久美子のすばらしさを二分ほどしゃべったのだが、一言言われたのである。

「メタボン、いくら理屈を言っても私には分かってるんだから。秋吉久美子が好きなのは、おっぱいが大きいからでしょ」

そういわれたとき、私の頭の中の全ての言葉と哲学は、秋吉久美子のおっぱいに向かって収束して、「テロ対策の法律は必要なのか」という話題に頭の中は変わっていったのである。

そうなのだ。人は、善悪の評価の基準の奥底に動物的本能的好悪の感情があるのだ。秋吉久美子のことをいくらほめても、最後はおっぱいがでつかいから。野球でイチローとデカ松井はどちらがすばらしいプレイヤーか。それはイチローだろう。何でかといえば、最終的には松井は超巨根ばいから。福田首相と小沢さんはどちらがすばらしい政治家なの。それは小沢さん。だって福田首相ってアマガエルみたいじゃん。ブッシュとビンラディンはどちらが人殺しなの。それはビンラディン。だってイスラム教徒で髭はやして汗臭そう。

秋吉久美子のおっぱいは、いまだに私を酔わせてくれるし、以前秋吉久美子と映画の中でベッドシーンをした何人かの俳優のわら人形を作り、丑三つ参りをしたことがあるが、別にそれでその俳優が死んだとか、体が不自由になったとかなどないし、私が不審者として警官から職務質問をされ、よくみたらその警官は高校の同級生の田中で、「すごいだろ。ピストル持ってんだ」と威張られたくらいである。

しかしブッシュとビンラディンなら話は違うだろ。どちらも人殺しにはかわりないことは確かだが、計画的大量殺戮の技術ではビンラディンなどブッシュとその子分どもの足元にも及ぶまい。

表面的にわれわれは911テロをリアルタイムで見て、イスラム原理主義者に怒りを覚えたが、なぜイスラム原理主義者があそこまで追い詰められたのかまでは、何も教えられていない。調べたい人だけ調べてね。アメリカ寄りの情報ならいやというほどメデイ

アに流すからね。

いまやアフガニスタンはまた世界一のケシの栽培国となり、イラクでは大量殺戮生物兵器など最初からなかったことが正式にアメリカでも認められ、イラク侵攻の大義もないままフセインは絞首刑となり、無政府状態の中で無力な民衆が毎日のように無意味に死んでいく。

善悪の評価の基準の奥底に動物的本能的好悪の感情があるのだが、純粹に理性のみで評価する力が試されるときがあるのだ。

秋吉久美子のおっぱいが許せるなら、イスラム教徒のあごひげも口ひげも感情的に見るのではなく、彼らの背後にある「欧米から抑圧された歴史」に思いをはせたい。

ちなみに桃ちゃんに、何で伊東美咲が好きなのか聞いたところ、「私の鼻って、とがってるけど、細くて横から見たら、ほほが邪魔してきれいに鼻がみえなかったりするの。伊東さんの鼻って横顔でも高くて立派な鼻が見事に見えるの」

（秋吉久美子ってそんなに鼻が低かったかな）

そう思いながら、「おやすみ」と電話を切った。

一話終了

第二話「岩手の夜を走れ」

第二話「岩手の夜を走れ」

「あなたは私の自由を束縛してうれしいの。私は私の一日を送りたいの」

携帯で俺が電話したら、開口一番がこれである。

桃ちゃんの話を聞いた。

桃ちゃんの携帯にはいまだに昔のお客からの電話やメールがあり、安売り王のレジの仕事が終わり、帰宅したあとは、昔の方々の応対に追われ、自分の時間がここ数日まったく持てず、アイドル並みの忙しさで、趣味のエアロビにも行けず、このままだと体重が五十五キロを超えて、おなかプヨプヨでカエル女になってしまふ、それでもいいのメタボン、ということだった。

まあ桃ちゃんは、近畿圏、特に滋賀県と京都府の「もてない君」のアイドルだ。

だから、携帯の多さは仕方ないが、自ら「アイドル並みの忙しさ」とのたまう37歳の女性はそういないだろう。

「私がカエル女になっても良いの」と言われても、ステイブーン・キングの小説でもあるまいし、バカなことと思うが、カエルに人間がなるのはやはり、正常なことではないし、正常でないことはいけないことだから、「桃ちゃんが、カエルになったらメタボン悲しい」くらいの反応で、桃ちゃんの「ノリ」に合わせるしかない。

恐らく桃ちゃんは、仕事場でも過剰に笑顔を振りまきながらレジを打ち、疲れた体で帰ってきたら近畿中の「もてない君」の悩みに無料で答えてやっているのだ。そして自分の自由のなさに気づき、万難を排してルネサンスでのエアロビ教室に突撃することを決意し、己の一日を完結させ

ようとしているのだ。

桃ちゃんは今から自由を求め、スポーツウェアを愛用のアディダスの緑のスポーツバックに入れて、夜の街に飛び出していくのだが、己の自由を貫徹させるために、有名ホテルにこもっていた人もいるのだから世の中は様々だ。

テレビをつければ、小沢さんのことばかりのこの頃。

自由とは自分の思い通りにすること、外的束縛からの解放だが、カリメロ福田首相からの大連立の申し入れを政策実現の好機と捉え、喜んで民主党に帰ったら、みんなから総スカンをくらい、何だこいつらは、私はいままでこの大金持ちの宇宙人の鳩ちゃんとの悪口言わせたら日本一のKAN君のために、どれくらいの努力をしたと思っているのか。私は、「一兵卒として民主党のためにがんばる」とまで言い、やっとこのだらしないやつらが威張った顔が出来るくらいに、参議院選挙で圧勝させたのだ。

はつきりいつて私は、この数年「アイドル並みの忙しさ」で過ごしたのだ。

それもこれも民主党の手で国民の生活をよりよいものにしたという「思い」からだ。

ここまで来て、何で私の「思い通り」にみんなは動かない。たとえ全国民から、腕白だだっこ親父、といわれても良い。己の自由を貫徹するために、民主党の代表をやめてやる、有名ホテルにこもってやる。民主党のやつらがみんなで「ごめんちゃい」するまで、日本一のだだっこ親父になってやる。

かくて小沢さんはホテルにこもり、桃ちゃんは夜の街を愛車トヨタパブリカで疾走するのだが、小沢さんと桃ちゃんのどちらが、真の自由か。

自由とは社会的責任や義務も伴う。要は社会的存在とし

ての人間は他者に迷惑をかけない範囲での自由を享受するしかないわけだ。桃ちゃんは私人であり、桃ちゃんが今日、近畿中のもてない君を無視しても、桃ちゃんに勝手に連絡してきた人々に答える義務はない。

でも小沢さんは公人である。

十一月四日の日曜の午後4時からNHKを右往左往させ、辞意表明をして、朝日と日経以外の報道機関に噛み付き、自分の党を、こんな政党が衆議院選挙で勝てるかよと大放言。七日にみんなが「帰ってちょ、帰ってちょ」といいだしたので、「ごめんちゃい」会見をして、珍騒動は終わりとなる。ここまでやったら、これは自由な行為の範疇のはずもなく、単なるわがまま。そこまで言うかよ、小沢さんである。

当然、小沢さんは桃ちゃんの爪の垢でもせんじて飲めとなるのだが、以上は常識論。

岩手県生れの小沢さんは、どうも暇なことが嫌いで、波風を立たせるのが大好きな人のようで、昔から政界の破壊屋とか言われていたが、政界の騒音おじさんなことは確か。小選挙区比例代表並立制という五回読んだら舌嚙んで死ぬのではないかという長ったらしい選挙制度を作った張本人でもある。

俺がしつこく書いている琵琶湖伝でいえば本多忠勝みたいな人で、民主党の前の自由党の党首の時は、ある選挙で町を歩いていると殴られ、何とか起き上がって歩き出すと違う人からまた殴られと言うシーンを延々と続け、最後に「私は打たれ強いんです」と自虐面白CMを作って、自由党の票を大幅に伸ばしたことがある。なにか目立つことをしないと気がすまない人なのだ。見方を変えると、常に注目されないと不安になる繊細な神経の人かもしれない。

面白いといえば面白い人で、現代日本においては絶滅危

慎種に指定されてもよいのではないか。なにか人間くさい感じがあって、だからメディアも小沢代表ではなく、「小沢さん」と親しみをこめて言っている気がする。裏では悪いこともやってそうで、悪代官の役とか似合うだろうが、それも含めて「小沢さん」なのだ。

ところで、桃ちゃんに「今からエアロビなら何時ごろに電話したらいいの」と言うと、「メタボン、私は自由に一日を過ごしたいの。さっき言ったでしょ。あなたは、私を鉄の鎖につなぎたいの。今日は誰の電話もとらないから。携帯の電源も切るよ」とのことだった。

「鉄鎖につなげられるなんて大げさだよ。SMかよ、団鬼六かよ。まさかフランス革命かよ。君はルソーか啓蒙思想家か、ジャコバン派か、それとも女性の自立を描いたイプセンの「人形の家」の主人公ノラか」と切り返したときには、もう電源は切れていた。

第二話終了

第三話「桃ちゃんは怒っているのだ」

第三話「桃ちゃんは怒っているのだ」

「もた先生の本って大好き」

桃ちゃんがトロ口を食べながら言った。

今日は寿司屋の政（まさ）の店でお食事会です。

政は四十がらみの長身で細身の男で、桃ちゃんを狙っているが、桃ちゃんもそれを知っていて、思わせぶりなそぶりなどして、けっこう割安で上ネタを食べたりする。当然「メタボンも食べなよ」となって、桃ちゃんのおすそ分けに預かるのがいつものことだ。

政は競馬の予想が好きでというよりギャンブル全体が好きで、そういう話題を話しかけてくるのだが、俺も桃ちゃんも博打には門外漢で、ウンとかソウとか気のない返事で、政に対応するのが普通になっている。

そんな政が今日は、「おい、「モタ」て誰だよ。外国人か、欧米か」と桃ちゃんの発言に突っ込みをいれてきた。

確かに「もた先生」って誰だろう。

桃ちゃんは小学生の時に中耳炎で耳をやられているので、耳が聞こえにくく、そのため声が大きい。

俺に言っただつてもりで、カウンターの向こうの政にまで聞こえたのだろう。

「えっ、政さん知らないの。メタボンは知ってるよね」

さも当然のように言ってきた。

「もた、もたね。何の先生なの」

俺もわからない。

「うわー、メタボンも知らないんだ。聖子、大ショック」と松田聖子の真似をした。桃ちゃんは松田聖子のファンクラブの会員である。

「もた先生っておじいちゃんなの。去年、死んじゃったけどね。私、おじいちゃんの本を読むのが好きでしょ。日野原先生（医学者の日野原重明さん）みたいに」

確かに桃ちゃんは高齢者の方が書く本が好きで、日野原さんの本を四、五冊持っていることは知っている。

そのとき、三年前の春、俺が山本周五郎の本を喫茶店でコーヒーを飲みながら読んでいると、急に桃ちゃんが現れて、メタボンでもコーヒー飲むんだと話しかけてきたことを思い出した。

俺はいつも外に出るとき、どくだみ茶をせんじたのを、保温のできる水筒にいれて持ち歩いているので、どくだみ茶以外飲まないと思っていたらしいのだ。当然のように俺の前に座ったので、コーヒーを注文してやったら、ありがとうと形だけいったあと、俺の持っている本を取り上げて、カバーを見て、二、三度小さく頷いたあとと微笑んで、「ひたいあん」と意味不明のことを言った。

その本のタイトルは「日々平安（ひびへいあん）」で、ましかよ、って感じで俺が「ひびへいあん」だよというところあつ、そうもいうよねと言いつつ訳をしたら。なんせ日ごろから声が大きいので、すぐ隣の席のおじいさんが、不思議そうな顔で俺と桃ちゃんを見ていた。さらに桃ちゃんは表紙を真剣に見つめだし、ふーん作者は、山本すごろう、つていうのね、とおっしゃったのである。

（しゅうごろう、だろ、このボケが）

といいかけて、何でこの人は周五郎を、素直にしゅうごろうと読まずに「すごろう」と読んだのかに興味が湧いてきた。

桃ちゃんは、唇をとがらせて、目の玉をくるくる回している。この表情は得意げなときの表情だ。つまり、よく「

す」と読めたでしょうと言ってるわけだ。

そういうときは、場を盛り上げるのが俺の性格なので、桃ちゃん凄すぎ、何で読めたのって聞くと、だって高杉晋作ってかっこいいじゃんといった。何で高杉なのか分からずますます俺は混乱したのだが、結局のところ、高杉晋作の伝記を読んだら、「周防（すおう）の国」って出てきたの、きのう読んだから、忘れるわけないよ、と言った。

記号論という分野がある。その分野の本を読むと、地図の記号のこともでてくる。たとえば、〒は郵便局のみを意味するものである。卍は寺院。このように、地図の記号は、ある記号に一つの意味のみをもたせる。これを一対一対応という。一つの記号が一つの意味を指すから一対一というわけだ。このことは言語にもいえ、「こんばんは」というのは「夜の挨拶」であり、まさに一対一対応である。

ただし言語は、「おはよう」を朝にも使うが、ある種の業界では朝昼夜の別なく最初の挨拶として使うこともある。つまり、一対多対応ということもありえるのだ。「周」も「しゅう」もあるし「す」という場合もある。桃ちゃんの場合、かなりの確率で一対一対応で言葉を読んだり、考えたりする。「す」とあったから、「すごろく」なのだ。だから桃ちゃんは衆人環視の中で自信たっぷり「すごろく」と読んだのである。

そのときは、喫茶店の帰り際に「しゅうごろう」と読むことを教えた。なかなか納得しないので、「校内一周」を「こうないいつす」と読むか。「世界周遊」を「せかいすゆう」と読むか。「円周率」を「えんすりつ」と読むか。「周期表」を「すきひょう」と読むのか。「一家に一枚、元素すき表を」というのかよ。あんなの「好きひよ」なんていうわけないだろ、なんてしつこく言ったら、やっと分かってくれた。

思い出したぞ。桃ちゃんは、メタボンは「どくだみ茶」。
「周」は「す」。というように、一対一対応で物事を考える癖を持っていたんだ。

となると、「もた」は、何かの字の読み間違いではないか。

池波正太郎風に書くと、

（わかった）

と其の時、メタボンは思量したのだ。

「もた」は「もた」にあらず。「おじいちゃん」がヒントだ。

アガサ・クリステイ風にいうなら、過去の記憶の引き出しが、ポアロじゃなくてメタボンの灰色の脳細胞を活性化させ、そういう答えをださせたのだ。

「桃ちゃん、どういう仕事をしているおじいちゃんなの」
俺は聞いた。

「精神科の先生」

「精神科のお医者さんで、おじいちゃんか」
俺が思わず叫ぶと、政が、

「山川先生か」

とわれわれの町の病院の先生のことを言い出したので、

「そんなわけではないでしょ、あのエロじじい」

と何か昔あったのか、桃ちゃんは急に目を三角にして怒り出したので、急いで俺が「お手」というと静かになった。

「苗字は何て言うんだよ」

政が訊いた。

「えーと、アレ、出ない。けど、もた先生のお父さんは有名な歌人^{うたひと}って書いてた」

桃ちゃんが、真剣に答えた。

「うたひと、それ、歌に人だろ」

俺が、漢字を指でカウンターに書いて見せた。

桃ちゃんはとにかく読み間違いをするから、推測は楽だ。

「そう」

「それは、かじん、だよ」

政が言った。

「有名な短歌を作る人が父親で、去年死んだ高齢者の精神科医で作家」

俺が付け加えた。

そのとき、政と俺の目が合い、同時に叫んだ。

「「もた」さんて、斎藤 茂太（さいとう しげた）だ」

斎藤茂太は二〇〇六年、つまり去年に九十歳でなくなられた作家にして精神科医、その父は歌人にしてこれまた精神科医の斎藤茂吉（さいとう もきち）。桃ちゃんは、「しげた」と父親の「もきち」を混同し、頭の中で一対一対応させた結果、「茂」は「も」と決め付けたにちがいない。だから「しげた」が「もた」になったのだ。

それから四、五分、俺は桃ちゃんが、一対一対応的に物事を考えすぎることを話してやり、そのあとは、政と俺で桃ちゃんに「しげた」と読むことを例で示した。

政は「長嶋茂雄」を出し、俺は「一茂」をだした。たいした例がだせなかったわけだが、桃ちゃんは「しげた」ともいうが「もた」ともいうのだと反論してきた。政が人の名前は普通一つだろうといい、俺も「もた」なんていうわけないだろ、昔、ポルトガル出身の女子マラソン選手に口ザ・モタというのがいたけど、斎藤先生は日本人だろ、桃ちゃんしつかりしろよ、と桃ちゃんを説得した。

「そうかなあ、でも「もた」先生というんだよ」

桃ちゃんはやはり不満げだ。

桃ちゃんがトイレに立ったので、その間に政と二人で「

だから中学校もでてない奴は困るんだ。漢字も読めないんだから」とひどいことを言って、笑いあった。

戻ってきて、「二人で私をバカにでもして楽しんでたんでしょ」などというので、俺たちは大げさに首を振って否定した。

それから二十分くらい経って、桃ちゃんにそろそろ帰ろうかというところ、そうねと桃ちゃんも言って立ち上がりかけたとき、客が入ってきた。

政の寿司屋から数十メートルのところに住んでいて、コンビニ「長崎屋」を経営する高木国男さん、五十八歳、である。通称、長崎屋国兵衛（くにべえ）。若いころは長崎に住んでいたそうで、その思い出から滋賀県なのに「ながさきや」なのだそうだ。色が黒くて、ほほになぜか深い傷跡があり、笑うと「凄み」があつて、時代劇の悪徳商人のように見えるので、時代劇風に長崎屋国兵衛というアダ名を、つまり、愛称をつけているのだ。

桃ちゃんの隣に座った。

「国兵衛さん今晚は」と俺が言うと、「おう。メタボンも元気が。政ちゃん、「特上」一人前ね」、「へい、ありがとうございます」、政は寿司の準備にとりかかる。

「桃ちゃん、この前、店に買い物に来たとき、斉藤先生の本がためになるといつてたよな。それで斉藤先生の本を買って読んだんだ。さっきこの店をちらつと覗いたら、桃ちゃんの姿が見えたんで、わざわざ家から本を持ってきたんだぞ」

政と俺は思わず、国兵衛がカウンターに置いた本のタイトルを見た。

「モタさんの落ちこみやすい人の“大丈夫！”な考え方」

一二六〇円（税込） 斎藤 茂太（著）とあって、紹介文には「人生八十年の時代、……人生の達人モタさんに

聞く」

と書かれていた。著者略歴、さいとうしげた・・・・・・・・愛称はモタさん。

桃ちゃんと二人で、店を出て、桃ちゃんの車を置いてある駐車場に向かった。

桃ちゃんの車で家に送ってもらうのが恒例だ。いつも俺より先に歩く桃ちゃんが今日は俺の後ろを歩いている。

「メタボン。本当に物を知らない人間って情けないよね。何が一对一对応なの。わたしイコール愚か者だと思っでんでしょ。何がポルトガル人よ、このボケが。アホはあんた達だったのよ。」

そういうと、ドーンと俺の背中に桃ちゃんは飛び蹴りを入れてきて、俺は数歩、よろめいた。

「私はね、綿棒りさの「蹴りたい背中」だって読んでるんだから」

桃ちゃんはけっこう怒っている。

綿棒りさではなく、「綿矢りさ」だよと言おうと思ったが、今夜はやめておこう。

第三話終了

第四話「鉄腕って知ってますか」

第四話「鉄腕って知ってますか」

「ねえメタボン、「鉄腕」って知ってる」

桃ちゃんからの携帯だ。

「鉄腕か、あー、日曜かな、テレビあるよね。田舎で作物を栽培したり、農林水産省が泣いて喜ぶような番組が」

「それは鉄腕ダッシュ。違う」

「違う」をかなり強めに言われた。

「鉄腕アトムだ」

俺は自信ありげに言った。

「ちがう」

一音、一音、丁寧に言われた。

俺はこつちから掛け直すと言って、携帯を切って、固定電話でかけた。

俺は男だし、関西人だが自称江戸っ子なので、女に金は払わせられない。

桃ちゃんが電話をとった。

即座に俺は答えた。

「鉄腕二十八号」

「メタボン、それは鉄人二十八号でしょ。何年か前に二人でその映画を見にいったら、お客さんが五人しかいなかったよね」

電話口から、情けないといった感じのため息がもれた。

鉄腕か、ウーン、そういわれても、分からない。

「桃ちゃんわからない、ごめん」

謝るしかなかった。

「鉄腕は、いなお。野球の選手で先週亡くなったでしょ」

「鉄腕稲尾か。神様、仏様、稲尾様だ」

「そうよ、メタボンいろんなことに詳しいから、訊こうと思ってただけど、鉄腕のことは知らないんだね」

桃ちゃんの期待を裏切り電話を切られたあと、鉄腕稲尾について調べてみた。

稲尾和久（いなお かずひさ、一九三七年六月十日―二〇〇七年十一月十三日）は、大分県別府市出身のプロ野球選手プロ野球監督、野球解説者、野球評論家。右投右打。現役時代の背番号は24。通称「鉄腕」。愛称はサイちゃん。享年七十七歳。

なるほど「鉄腕」だ。愛称の「サイちゃん」は動物のサイのように眼が細かったのと、普段は静かで「サイ」のようにおとなしかったからだそうだ。しかし、鉄の腕を持っていて、動物のサイ（ゾウに次ぐ大型の陸棲哺乳類であり、最大の種であるシロサイは体長四メートル、体重二トンに達する。その巨体に似合わず最高時速五十キロで走る。サイの皮膚は非常に分厚く硬質で、体全体を鎧のように覆っている。その皮膚はあらゆる動物の中でも最硬といわれ、肉食獣の爪や牙を容易には通さず、肉食獣に襲われて捕食されることは滅多にない）にたとえられる人間って、どんな人間なんだろう。

たとえば、稲尾さんと同時代のプロ野球の他のスーパースターは、長嶋茂雄なら通称ミスタージャイアンツ、王貞治は世界の王、野村克也は人間コンピューターと呼ばれているのに、稲尾さんは、鉄腕でサイなのだ。これでは、プロ野球ではなく、プロ野獣ではないか。ほとんど、レスラー並みの呼び方である。いったい、稲尾さんってどういう人なんだ、俺は猛烈に稲尾さんを、もっともっと知りたくなった。

稲尾さんは、一九五六年（昭和三十一年）大分の別府緑丘高

等学校（現・芸術緑丘高等学校）から福岡県福岡市にあったパリーグの西鉄ライオンズ（現・西武ライオンズ）に入団した。高校時代は甲子園に出場経験もない、無名の存在であったという。しかし、漁師の父の手伝いで幼いころから小船に揺られ櫓をこいで鍛えた体力（この実話も現実離れしてすごい）と抜群の投球術で大活躍、五七年（昭和三十二年）同一シーズン二十連勝のプロ野球記録を達成し、昭和三十三年の日本シリーズでは巨人に三連敗したあと四連勝して日本一になった西鉄の優勝の原動力として、実に七試合中六試合に登板（うち五試合に先発、四試合完投）し、第三戦以降は五連投、更に第五戦ではシリーズ史上初となるサヨナラホームランを自らのバットで放つという、文字通り「獅子奮迅」の活躍を見せ、「神様、仏様、稲尾様」と次の日の新聞に書かれて、以後、「鉄腕」とともに「神様、仏様、稲尾様」は稲尾さんの代名詞となる。

稲尾さんは、鉄腕でサイで神様なのだ。

記録としては、二十一勝で新人王を獲得、前述した二十連勝の日本記録、六一年には何と78試合に登板、シーズン勝利の日本タイ記録となる42勝（14敗）、入団から六三年までの八年間で234勝を挙げる。まさに鉄人だが、誰が考えても投げすぎ、登板過多であり、六四年には肩をこわして0勝に終わる（この落ち込みの激しさもすごいけど）。それでも六五年から引退の六九年までで、肩の痛みのに耐えながら通算四十二勝を挙げ、防御率はこの間でも二点台であった。現役生活十四年の生涯成績、二七六勝一三七敗、防御率一・九八。引退後も指導者として活躍し、七〇〜七四年西鉄、太平洋監督、七八〜八〇年中日投手コーチ、八四〜八六年ロッテ監督を務め、九三年に野球殿堂入りをしている。

今まとめてみると、六三年までの稲尾さんはまさに超人で、

人間離れしているが、肩をこわしてもすぐに引退せず三十二歳の若さとはいえ（最後の年は一勝七敗）、己がプロの選手として燃え尽きるまで、投手としての分を全うしようとした、その生き様に、その人間らしさに、人間性に感銘を覚えた。最盛期に挙げた一シーズン四十二勝と肩をこわしてから六年間での四十二勝。数字は同じだが、最後の六年間の苦労は想像にあまりあるものだったろう。

稲尾さんは生前よく、「分をわきまえたい」といつていたという。五十二年前に大分の別府から福岡にやってきた少年は、プロの投手としての分をわきまえ、お客さんの声援にこたえるために、己の体力の限界を忘れ、投げて投げて投げまくったのである。そして最後の六年間も、鉄腕稲尾を見に来るお客さんのために、体が本当にボロボロになるまで、マウンドを降りようとしなかったわけだ。

稲尾さんは、マウンド上のマナーが非常に優れていたことでも有名だったそうで、インニングが終わり相手投手にマウンドを譲るときは、必ずロージングバグを一定の場所に置き、自分の投球で掘れた土の部分を丁寧にならしていたという。相手の投手に対する思いやりという、人間としての分もわきまえていたのだろう。

歴史に残る大投手、若くして神様になった伝説の人であるにもかかわらず、日常生活では、温和で腰の低い人であったことは知られている。

亡くなれたあと、様々な人にメディアがインタビューしているが、西鉄黄金時代のウグイス嬢（プレイヤーの名前を場内に告げるアナウンスをする女性）にコメントを求めた時、その方は、「九番ピッチャー稲尾」と当時のアナウンスを再現したあと、涙で絶句し、「お茶目で、温厚でやさしいひとでしたよ。かわいそうで、たまりません」と述べていた。

やはり、稲尾さんは鉄腕でサイだった。

世界では本物の神様のために、銃を撃ち合い、火をつけ合い、場合によっては自爆し合っているが、我が神様稲尾様は本当に常識人で、誰に迷惑をかけるでもなく、この世から去って逝かれた。

数多くの記録と記憶を残して。

桃ちゃんに、こんな話を書いたんだと固定電話で話したら、「ふーん、「実るほど頭（こうべ）を垂れる稲尾かな」ってことわざは、そこから来たんだ。稲尾さんってすばらしい人だね」

と言った。

「実るほど頭を垂れる稲穂（いなほ）かな」だと、突っ込もうとしたが、やめにした。

今夜の桃ちゃんはマジで冴えているから。

第四話終了

第五話「二十一世紀最大の発明」

第五話「二十一世紀最大の発明」

二十一世紀最大の発明は、不死身の体を作る薬であつた。それは、如何なる細胞をも再生させる万能細胞を、破壊された体内の細胞組織を再生させる技術から作り、その万能細胞を零下百度に凍らせ、次に細かく破砕した上で、某県の湖の湖底からしかとれないイイカゲーンという酵素と掛け合わせて、粉末状の薬にしたものである。普通、万能細胞は全ての人間に完璧に対応できるはずはなく、試験者の体内での拒否反応や言語を絶するような副作用があるはずなのだが、イイカゲーンは薬を飲んだ者の、遺伝子情報を即座に感知し対応してゆくため、拒否反応も副作用もないのである。

まさに夢の発明、発見であり、ある地方某県の私立大学でスポーツ医学を教えている、東方博士（ひがしかた ひろし）という男、一人の手によるものであつた。

少子化の影響で地方の私立大学など学生も集まらず、暇つぶしに湖で釣りをしていて、イイカゲーンを発見し、そのイイカゲーンを骨の再生の研究に応用しているときに、偶然、不死身の薬を発見したのである。

東方博士はこれをフジミタンと名づけたのだが、しかしその効力については何の記録もない。それは東方博士が、三つの理由からその発見に恐れを抱き、公表をためらつたからである。

一つ目は、もし自分の研究がインターネットなどで流されたら、あまりにもその再生技術が容易なため、非人間的な何者かに何らかの形で悪用されるのではないかと、考えたからである。

二つ目は、日本国政府への不信感であつた。もし公表したならば、政府にその技術を管理してもらつしかないと考えたが、連日

のニュースで聞かされる、官僚の腐敗は許しがたいもので、このような人々を高い税金で養っている国自体が信用できなくなっていたのだ。もし、自分の技術が、人口十億前後の国や道徳的に劣る国に流出したら、個人的悪用どころか国家規模のプロジェクトになり、人口大爆発は眼に見えている。最高の発明が、地球に食糧危機を招いては何の意味もない。特に日本は、食糧自給率の低い国であり、食糧問題の荒波の直撃を受けるかもしれない。そうなることは、愛国者、東方博士には耐え難いことであった。

三つ目は、もし公表したなら、自分もフジミタンを飲みたくなるかもしれない。しかし、果たして、不死身となって生きていくほど、この人生に、この日本で生きることには価値があるのかどうかに、はっきりした確信が持てなかったのだ。また永遠に生きる事に、人間的価値はあるのかということにも疑念があった。

以上のことから、東方博士は公表の決心がつかず、製造したフジミタンの粉末剤を一人用だけ残し、あとは、飼い猫のマオに猫用スープと一緒に飲ませた。

それから、二十年、マオは当然だが、東方博士も元気であった。しかし、七十歳を迎えたとき、彼は突如意識を失い、病院に担ぎ込まれた。眼がさめると、医師から末期がんで余命三ヶ月と宣告された。

生存本能のおもむくままに、東方博士は残っていたフジミタンを服用した。

効果は抜群であり、医師から一週間後、「再検査したらがんが消えていた。奇跡としかいいようがない」と、自分のレントゲン写真を見せられながら言われた。

それから四年後、東方博士は末期がんをまたも宣告され、宣告後二週間で死んだ。

イイカゲーンは服用者の遺伝子情報を感知し即座に対応させるものだが、がん発症の遺伝子情報もしっかりと読み込み、四年後に確実にがんを発症させたのである。

「あんたつて、本当にひまだね」

桃ちゃんが言った。

「こういうのをショートショートっていうんだよ。ちよつと書いてみたんだ。どうだった」

俺が感想を求めると、

「これつて、この前、ノーベル賞級の発明つて言われてたニュースをヒントに作ったただけでしょ」

と見事に喝破された。

そうなのだ、不死身になれる薬や医科学技術といった話は、二十世紀ならばSFのショートショートとなりえても、二十一世紀には、現実の話なのだ。

一九九六年七月にイギリスのスコットランドのエディンバラ市近郊にあるロスリン研究所で「ドリー」と名付けられたクローン羊が誕生した。1997年2月23日にそのドリーの誕生が発表される

と、世界中が大騒ぎになった。

クローンという言葉の語源は、ギリシャ語で「K l o n 〃小枝」

だが、現在では「遺伝的に同一である個体や細胞（の集合）」を指す生物学の用語として使われている。クローン羊とは、お互いに全く同じ遺伝子組成を持った複数の羊なのだ。言い換えれば、全く同一の羊のコピー、複製が製造されたわけである。

成熟した羊などの体細胞からクローン（体細胞クローン）を生み出すことができることが証明されたことで、同じ哺乳類である人にクローン 技術を適用できる可能性が出てきたのだが、それは、男女の関わりのないもので、生殖における両性の存在意義、人間の尊厳、家族観への影響等の生命倫理上の問題を提起することになり、クローン技術の人への適用は、医学 や生物学の側面からだ

けでなく、倫理・哲学・宗教・文化・法律等の観点から否定されている。

問題のクローン羊「ドリー」は、二〇〇三年二月に死んだが、クローンヒツジを作出したロスリン研究所のイアン・ウィルムツトやキース・キャンベルなどはさらに胚性幹（ES）細胞といわれる様々な細胞に分化できる万能細胞の開発に邁進した。もしその開発に成功すれば、人間の細胞や臓器の再生が可能になり、多くの難病を地球上から一掃させる可能性があるのだ。

この最先端医学技術の開発に界ではじめて成功したと、二〇〇四年二月に韓国の黄禹錫（ファン・ウソク）教授が発表して、世界中を驚かせ、韓国の人々は、国の誉れとして、学校の補助教材に「黄禹錫伝」を作成したほどである。韓国政府は「最高科学者」の第一号に認定。政府によって二十四時間の警護が行われ、「黄禹錫バイオ臓器研究センター」を設立するなど支援を惜しまなかった。民間からは大韓航空のファーストクラスに十年間乗り放題、業績を記念して五メートルを越す巨大な黄禹錫石像が建立され、インターネットでは数々のファン・ウソクファンクラブが生まれた。

ただ当時から、「ウソクさい」という冗談を言われていたのだが、なんと二〇〇五年末に黄博士のES細胞に対する論文が、完全な捏造であることが確定して、本当にウソくさいものであったことが判明する。

韓国民の落胆も激しかったが世界的にも黄博士の論文を信用していた研究者も多く、万能細胞の研究を取りやめたところもあったのである。

そういう世界を巻き込んだドタバタ騒動の中でも地道に万能細胞の研究をしていた機関が世界にいくつもあった。その中の一つ、あのドリーの生みの親で今はエディンバラ大学で万能細胞の研究をしていたイアン・ウィルマツト博士が研究を断念する方針を決めたことが二〇〇七年十一月十七日に世界に打電された。

ウィルマツト博士の研究は卵子が必要で生命倫理上の問題がかねてより、指摘されていた。京都大医科学研究所の山中伸弥教授らがマウスの皮膚細胞から新たな「万能細胞」をつくるのに世界で初めて成功したことに博士は注目、自身の研究方法を断念したのである。山中教授は昨夏、マウスの皮膚細胞に遺伝子操作を加えES細胞と同じ働きをする新たな「万能細胞」をつくるのに成功。ヒト細胞への応用も可能とみられており、同博士は山中教授の研究の方が「社会的に受け入れられやすい」と評価している。ちなみに山中教授はそのあと、NHKなどに出演してインタビューに答え、己の研究のさらなるレベルアップを誓っていた。

「メタボン、私のお母さんが何で死んだか知ってるよね」

桃ちゃんのお母さんは、重度のリウマチから様々な病気を併発しなくなられた方である。関節が健康な状態に再生されるなら、お母さんも死なずにすんだかもしれない。

俺は、冒頭の掌編で生きる意味などを書いたが、実は、今すぐにも、山中先生の生命医科学技術を待ち望んでいる人がいるのだ。俺は、そこまで考えず、桃ちゃんに作品を読ませた。きっと桃ちゃんは「何書いてんの、私の身にもなつてよ」と思っていたのだろう。桃ちゃんがお母さんの手術代や入院費用に困っていたことはしっていたし、俺は、励ますくらいしか出来ず、お母さんの見舞いにも行かなかった。それでも桃ちゃんは、俺を友人としてつきあってくれる。

「桃ちゃん、ごめん」

そう言うと、

「わかれば、いいの。今日は焼肉屋にいこうよ。塩タンだけメタボンのおごりね」

と微笑んだ。

焼肉屋に着いて、テーブルに座ると、「あの羊のメリーちゃんはどうなったの」と聞いてきた。

（メリーちゃんでは、メリーちゃんの羊、羊、羊、メリーちゃん
の羊たのしいな、って歌だろ、だいじょうぶかよ、頭は）

内心ものすごい悪口を言いかけたが、優しい口調で「ドリーは
ね」と受け流した。

第五話終了

第六話「ベーターヴェンをぶつとばせ」

第六話「ベーターヴェンをぶつとばせ」

季節は十二月だが、うちの会社はボーナスも両手の指ほどしかないのはわかってるので、何かを買おうかという楽しみなどなく、まあ飢え死にしない程度に生きるために、職場に行く以外は、家で寝ところがつている。なぜなら、人間は、動けばなんらかの消費活動をする動物で、消費活動は金銭に連結する。といっても、家でじっとしていても、食事はせねばならず、やはり金がかかるのだが、その支出はやはり家で寝ていたほうが、少なくて済む。俺が三九年と五ヵ月生きてきて得た結論の一つが、「人間は息をする限り力ネのかかる動物だ」ということである。この絶対的真理に敵うものはない。できたら、小学校でこのことを全ての子供たちに骨の髄まで叩き込んでほしい。それが、子供たちを強い人間にする基礎を作ってくれるだろう。

そんなうつとうしいことを書いてたら、桃ちゃんが携帯で俺の固定電話にかけてきた。桃ちゃんの地域では、地域婦人会の催しとしてベーターベンの「歓喜の歌（喜びの歌）」を市民ホールを借りて年末に歌うというのだ。

「メタボンは、ベーターベンの歓喜の歌を知ってるよね。CD買ってこのごろ毎日聴いて、雰囲気をつかんでるんだけど、何か心の奥底から勇気がわいてくる気がして、ヘッドフォンで椅子に座って聞いていたんだけど、心が高ぶってくるのがわかるの。ベーターベンはこの曲を作ったとき、耳がほとんど聞こえなかったんだって。彼は心の耳で作ったのよ。あー、偉大なるベーターベン。聞いていくうちに、思わず立ち上がった、近くにあったボールペンを手にして、指揮棒代わりにふ

りながら、歌ったの。本当にエネルギーが体にみなぎって、最高だった。無気力気味のメタボンも是非、聴いたほうがいいよ。絶対生きる勇気がわいてくるよ……間違いない」

最後はどこかで聞いたような言い方で終わったが、俺は何を言ってたんだ、歌くらいで生きるエネルギーがわくわけないだろ、と憎まれ口を叩きながら、急に、「よかったら俺の歌を聴いてくれませんか」と下手にでた。実は俺は二十代のころ、ソングライターを目指してひたすら引きこもりをして曲作りに励み、いろんなレコード会社にデモテープを送ったり（どこからも連絡はなかった）、ミニコンサートを開いたり（観客は桃ちゃん一人、そこで桃ちゃんと知り合いになったのが）したがまったく駄目で、

やっとおいらも この街を離れられる

君がさみしげに 見送るのがとてもつらいよ

昔話の ミュージシャンのサクセスストーリー

なんておいらにや 夢のまた夢

君も疲れたなら こんな歌でも歌うがいい

泣き笑いの 人生って歌を

という「サクセスストーリー」って歌を最後に作って、ギターを封印したのだが、突如歌いたくなったのだ。

「メタボン、オリジナルの一曲よ」

桃ちゃんのボランティア精神に富んだ声が電話口からした。すぐさま俺は、頭に浮かんできた「マイ スモールタウン」という歌をアカペラで唄った。

ジムモリスンの タッチミーを聴いて
歌のすばらしさに気づいたよ

レイチャールズ ヤザワの

音楽が俺の教科書だった

こんな小さな街の中で

いつかいつかと 夢見ていたさ

It's so my small town

いま夜に 俺だけが生きている

二番目を歌おうとしたとき、「これにて打ち止め」

と桃ちゃんはいい、

「とにかく、大晦日の朝の十一時から市民ホールで合唱会があるから、来なさい。婦人会のおばちゃんに会えるよ、遠慮はしなくていいから」

と早口でいうと電話は切られた。

俺は昔から「歡喜の歌」は題が嫌いで、聴く気がしない。

幼いころから病氣ばかりしていて、運動会もプールに入ったのも高一だ。正確には高校は体育祭などというから、結局運動会には一度も参加しなかった。楽しいことなどないのに、

「喜びの歌」を歌ってどうする。ただ、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」を中三のときに読んで、読んだ理由は学校の図書館にあった世界文学全集に「人間の絆」とか「武器よさらば」とか「車輪の下」なんて中に、「ジャン・クリストフ」って人名そのままがあったので、なんだこれはって感じで手にとると、「偉大なヒューマニスト作家ロマン・ロランの不朽の名作・ベートーヴェンをモデルに創造したドイツの作曲家ジャン・クリストフの生涯。閉鎖的な十九世紀のヨーロッパで、貧しい音楽家として生まれた主人公が、様々なものと戦いながら成長していく物語」と紹介文があり、「歡喜の歌」野郎がモデルだと思ったが、これも何かの運命かと借りたのだ。で、その内容は覚えていないが、小説のモデルになるくらいだから、「歡喜の歌」野郎を調べたことがあつ

た。ただ二十年以上前のこと、もう一度調べてみた。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（一七七〇年―一八二七年）は、ドイツの作曲家。ボン生まれ。彼は楽聖と呼ばれ、作品は古典派音楽の集大成とされている。かれは身なりをほとんど気にせず「汚れ熊」といわれ、しばしば浮浪者と間違われて逮捕される事も何度も有ったそうで、また、慢性的な腹痛や下痢は終生ベートーヴェンの悩みの種であった。

なんてことを知ると、実は俺自身が年に二回は職務質問されるし、小学校のとき、授業中にいつもおなかが痛くなり先生に許可を受けてトイレにいった。あまりに授業中にトイレにいくので、サボッていると先生たちから勘ちがいされ、それが原因で俺は、不良になりかけたことがあり、いまだに一日4回は大きいほうにいくので、久しぶりに接したベーやんに俺は親しみを感じてしまった。

これは有名だが、ベーやんは二十代後半から始まった難聴が次第に悪化し、晩年の約十年はほぼ聞こえない状態にまで陥っていた。自称ソングライターのあつしがいうまでもなく、音楽家にとって、耳は命である。芸能人は歯が命、古すぎ御免、でそういう過酷な運命に立ち向かったベーやん、一八二三年交響曲第九番二短調は完成した。ベーやんの最後の交響曲であり、親しみを込めて第九（だいく）とも呼ばれる。

「歓喜の歌」は第四楽章でシラーの詩『歓喜に寄す』に音楽を付けたものである。桃ちゃんがいのように、その成立の状況を知るだけでも、波乱万丈のドラマである。この第九こそ、ベーやんが苦しみの果てにつかんだ、音楽の真髄、ここには苦しみを乗り越えての歓喜があるのだ、なんてことでステレオタイプのしばしばまとめられる。

しかし見方を変えれば、耳が聞こえなくても体内に「ドレミファソラシド」が滲みこんでいたから、複雑な交響曲を作

りえたわけで、その点では、普通の人間に出来るものではなく、偉人ベーヤンというより、超人、スーパーマンであって、人間業ではない。人間ではないその人の伝記を聞かされて、桃ちゃんのように単純に耳が聞こえないのにこんな名曲を作ったの、すごい、興奮するでは、お気楽すぎる。

俺は、山本周五郎の好きな言葉、ストリンドベリの「苦しみつつなお働け。安住をもとめるな。この世は巡礼である」に惹かれる。人生自体が霊場を巡るようなもので、神聖な旅であり、安息を求めることは、人生の旅をやめることだ。

かつては俺にも夢があった。しかし夢の多くは実ることなく終わるが、たとえ実らなくてもその夢に向かう努力があれば良いのだ。また、その飽くなきチャレンジ精神こそが、神聖な人生を歩かせてもらうための、作法であり、礼儀なのだ。俺とベーヤンは比べられるはずもないが、もしベーヤンが人間らしい素晴らしい人だと評価されたとしたら、それは己の音楽の夢を、理想を死ぬまで追求し、見事な巡礼を果たしたことだろう。

久しぶりに、ロックンロールの古典「ロール オーバー ベートーヴェン」を弾こうと押入れからギターをだして、調弦をしていると何と二弦が切れてしまった。

やっぱりベートーヴェンは、ぶつとばせない。

第六話終了

第七話「丘の上ではヒナゲシの花なのだ」

第七話「丘の上ではヒナゲシの花なのだ」

桃ちゃんは、幼くして両親をなくしてお父さんの兄にあたる、大谷竹次郎という人に育てられていた。十日ほど前にその竹次郎おじさんが死んだ。

六十二歳。死因は急性心筋梗塞であった。

葬式には俺も参列したが、桃ちゃんの喪服姿に思わず欲情しかけたが、当然口にはださず、

「桃ちゃん元気をだしてね。また電話するから」

と木で鼻をくくったようなことをいって別れた。

十日後に俺は、固定電話をかけた。

「おじさんって、昔桃ちゃんが見せてくれたお父さんに似てたね」
「えっ」

「お葬式のときの写真を見て、そう思ってたんだ」

「それは兄弟だから。でもおじさんは厳しかったよ。中学校卒業して、おじさんの家をでるまで、どれくらい叩かれたか。虐待されてたね」

「こわい人だったんだ」

「うん、でも優しいところも、今考えたらあったよ。ヒナゲシの花が好きで、全然草むしりしないで、小さなお庭がヒナゲシだらけになったことがあって……」

今からの話は、桃ちゃんの思い出話。

あまりにヒナゲシの花が繁殖するので、桃ちゃんの庭と接している隣の家にまで、ヒナゲシが侵食して、隣家の人が怒ってある日曜日、桃ちゃんの庭にかつてにはいりこんで、ヒナゲシをどん

どん引き抜いていたそうさ。

桃ちゃんのおじさんは、急いで庭にでて、そのあとを幼い桃ちゃんもついていくと、おじさんは隣家の人に、

「人の庭で勝手に花を抜かないでくれませんか」

とおだやかな口調で言ったそうさ。

「えっ、どこに花があるの、ヒナゲシは野草だぜ。雑草だぜ。お宅が野草を抜かないからうちの庭にまではびこってきて、こっちはおお迷惑なんだよ。だからぬいてやってるの。感謝してほしいな」

隣の人は強気でいう。

「ヒナゲシはポピー」ともいうけど、確かにふつつ雑草といわれますよ。でもね、雑草と決めたのは、あんたでも、わたしでもなく、どこのだれか知らない多くの人々の勝手な思いつきの集合で「雑草」といわれてるんだ。あんたの家の庭に生えたヒナゲシは生えてほしくない困ったものだから、迷惑な草で「雑草」なんだろうが、わたしはこのヒナゲシに美しさを感じて、立派な「花」だと思ってるんだ」

おじさんは少し語気を強めていった。

その語気に押されたのか、隣の人は、

「雑草を花というような頭のおかしい奴と話ができるか」

と自分の家に戻ったという。

まあ、頭のおかしな人間を無視するのは一つの識見で、無用な争いは己の人格を下げるだけだが、桃ちゃんはおじさんの、雑草かどうかは感じる者が決める、という言葉にこどもながら、そうかも、と思ったそうさ。

そのあと、おじさんは桃ちゃんを連れて、ファミレスに行き、ハンバーグセットを食べさせながら、呉林（ごりん 隣のひとの名前）みたいな何もみえないのに、見えたつもりになってるようなバカになるな、あんなのときあうと感性が鈍るだけだ、心が穢れる、それと十四歳になる呉の息子とも口なんてきくなよ、バ

力が移るからな、といったそうだ。

桃ちゃんとの電話がおわったあと、ヒナゲシを調べたら、
「野草その中でもヒナゲシ類は丈夫で繁殖力が強く、ヨーロッパでは小麦畑に生える野草、ないしは雑草としてコーンポピーの名が有り、日本でもナガミヒナゲシは、いたるところに繁殖し、可愛いので栽培種と思ったりするが、帰化種で、実（み）が長いのでナガミヒナゲシの名が有る。虞美人草とも呼ばれ、中国の楚王であった項羽の愛妾であり中国三大美人の一人である虞妃（虞美人）が項羽が敗れた後自殺した時、その血の中から咲いたと言う伝説がある」とあった。

そういわれたら、俺の家の近くの公園にもいつも初夏になると野草が花を開いて密集して、それを見るのが毎年の楽しみの一つだ。
野草は、誰かが一生懸命に丹精こめて育てたわけでもないのに、いつのまにか美しい花が咲き乱れる。ヒナゲシなどはその典型だろう。ヒナゲシを私は邪魔しないし、ヒナゲシも俺が自由にふるまうことをさまたげない。

野に咲く花の名前は知らない

だけでも野に咲く花が好き

古本屋で立ち読みした、寺山修司という人の詩集にあった言葉だが、「雑草のように踏まれても踏まれても立ち上がる人間になれ」と古来からよくいわれるが、そんな精神は単なるSM好きの人間に任せたいし、俺は寺山さんの純粹に対象を愛でる感性、束縛されない知性にあこがれる。

もしヒナゲシなどの野草が、自然への抵抗力がない花ならば、ひとは何とかこんな美しい花をたやさないように、よく手入れをして育てようと思っただろうが、なんせヒナゲシは、紀元前の中国の古典にもでてくる由緒ある野蛮な花で、数千年にわたり、全世界中にはびこっている。だからか、人は雑草は邪魔だ根絶だと、桃ちゃんの隣の家の人のような行動をとる。

しかし、そのはびこりこそヒナゲシの持つロマンだろう。

われわれが眠っているときに、もしかすると、ヒナゲシの小さな種は風に吹かれて、あなたやかれのかのじよの、近くの土地に降りていつのまにか美しい花を咲かせてくれるかもしれないのだ。

こんなことを徒然に書いていると、意外と俺も野草好きだったんだと自覚させられた。

最後に公園で勝手に咲いてるヒナゲシなら、いくら摘んでもただである。いまどき、ただで美をもらい、夢を感じさせるものがあるものか。

そんなあつかましさを許してくれるのも、ヒナゲシだ。

で、これで今回は終わりだが、ヒナゲシならレンタル屋で視聴した「黄金の七十年代アイドル」所収、アグネスチャンのあの唄でしめるべきだろう。

おっかのううえ、ヒツナゲスイのはあなでえ、うつらなつのあつのひとつの、こおーころー……………♪。

第七話終了

第八話「賢者のクリスマス」

第八話「賢者のクリスマス」

コンビニ「長崎屋」を経営する高木国男さん、五十八歳。通称、長崎屋国兵衛（くにべえ）。若いころは長崎に住んでいたそうで、その思い出から滋賀県なのに「ながさきや」なのだそうだ。色が黒くて、ほほになぜか深い傷跡があり、笑うと「凄み」があつて、時代劇の悪徳商人のように見えるので、時代劇風に長崎屋国兵衛というアダ名がついている。

この国兵衛が俺と桃ちゃんがクリスマス・イブのとある午後、喫茶店でカフェラテを飲み、プレゼントの交換をしようとしている時に、「みーつけ」などと幼児のようなことを言いながら乱入してきたのだ。

「国ちゃん、今日はお店の稼ぎ時じゃないの。こんなところで油売っても仕方ないでしょ」

桃ちゃんが注意すると、

「遅い昼飯食べて、店に戻ろうと歩いてたら、お二人の姿がみえてね。こりゃ、邪魔するっしかないっしょ」

と今度は、あと二年で還暦のくせにえらく若い言い方をした。

「国兵衛さん、せっかくクリスマスプレゼントの交換会をしてるんだから、邪魔しないでくれよ」

俺が言うと、

「まあ気にするなよ、メタボン。私もさっきバイトの女の子からプレゼントをもらつてね」

と俺の横に座ってポケットからマッチ箱くらいの大きさの丁寧に包装されたものを取り出して、乱暴に包装紙を破

ると、でてきた小箱から中身を取り出した。

ネクタイピンだった。

「良いのもらったね」

桃ちゃんが声をかけると、国兵衛は気難しい顔になって独り言のように言った。

「贈り物は中身が問題ではない、大切なのは贈り主の心だと聞き飽きたようなことを、みんな言うが、大間違いだ。私は五十八年生きてきて、けっこう若い奴らをバイトで使っているから、クリスマスにはいろんなものをもらうが、その場しのぎで買ってきたような物ばかりだ。このピンなんて五百円で桃ちゃんがレジしてる安売りの店に売ってるよね」

桃ちゃんは頷いた。

国兵衛は憎憎しげに言った。

「むかつくような贈り物をするものだ。私が五百円で喜ぶと思ってるのか。贈り物は心だなんて大ウソだ。贈り物は「中身」なんだよ。もし相手に真心があるなら、相手を見て、それなりの品物を考えて贈るはずだよ。こんなクズくれやがって……。まあいいか。桃ちゃんとメタボンには関係ない話をしてごめん」

そついうと勝手に千円をテーブルに置くと帰っていった。俺と桃ちゃんのカフェラテ代をおごってくれたわけで、

桃ちゃんが、

「国ちゃん、ありがとう」

と店を出かけた国兵衛に声をかけると、

「オウツ」

と軽く手を挙げながら出て行った。

出て行く時に、店のゴミ箱に、さっきのネクタイピンを捨てていった。

「国ちゃん、寂しいのかも」

桃ちゃんは、国兵衛の贈り物に対する傲慢な考えに、ムカツクどころかそんな発言をした国兵衛の心の「乾き」を心配した。

俺は、

「いやな野郎だ」

で終わった。

そのあとはプレゼントの交換会。

俺は、三千円のサンダル。冬にサンダル贈るかよだが、桃ちゃんの要望だから仕方がない。桃ちゃんからは、桃ちゃん自身が編んだ毛糸の帽子だった。

桃ちゃんと別れたあと家に戻ったが、国兵衛の考えが気になった。

贈り物は心が大切だが、本当に心があるなら中身もそれなりにきちんとしたものを贈るはずだ、という国兵衛の考えは正論かもしれない。

国兵衛はそれなりの金もあるだろうし、地域の顔役でもある。五百円のネクタイピンは屈辱と思えたのかもしれない。

だが、贈った本人の五百円の価値が、国兵衛の五百円の価値と同じとは限らない。もしかしたら国兵衛の一万円の価値と同じかもしれないのだ。そうなると、心と中身は比例するという国兵衛の理屈も怪しくなる。

借金してまで、クリスマスプレゼントに力ネをかけるひとはそういない。

クリスマスとは、イエス・キリストの降誕（誕生）を祝うキリスト教の記念日である。「神様が人間として産まれてきてくださったこと」を祝うことが本質である。十二月二五日がこれに当たるが、昔の暦では日没を一日の境目と

しているので十二月二十四日夕刻から次の日の朝までをクリスマス・イブとして祝う。

新約聖書では、イエスの誕生時にやってきてイエスを拝み、黄金などを贈り物としてささげた東方の三博士（とうほうのさんはくし）が紹介されているが、三賢者とも言われる彼らがクリスマスに贈り物をするという習慣の起源になっている。

彼ら賢者は、黄金をささげてイエスへの贈り物としたが、それを天空から見ていた神様は、別に贈り物の中身など気にしなかったであろう。神様がカネに汚いとか、物欲まみれになっているとか聞いたことがない。

ということは、クリスマスの贈り物はもともと宗教的なもので、別によほどの失礼にあたらぬ限り、神様だつて怒るような贈り物をしない限り、金銭の多寡に関係なく贈り物はしてよいことになる。

国兵衛にネクタイピンを贈ったバイトの子は、きっと国兵衛のことを真面目にイメージして、喜んでもらおうと、財布から五百円を出したはずである。なにかしら相手に喜んでもらいたいという気持ちだが、贈り物にこめられた贈り主の「こころ」だろう。

ここまで読んでこられた人なら、桃ちゃんが俺にサンダルを「要望」したことは、物をせがむ行為で、贈り主の心を無視したもののように見えるかもしれない。

桃ちゃんがプレゼントをリクエストしたのは七年前からだ。

その前の年のクリスマス。

ホテルの鉄板焼きの店で食事をして、それから喫茶店でコーヒーを飲みながら、同時にプレゼントを出したところ、なんと俺が文庫版の四九八円の「星の王子様」、桃ちゃん

が大型版の千七百円の「星の王子様」を出したのだ。

お互いに笑いあつて店を出たがその時、「来年から桃ちゃんのリクエストしてね」と俺が言ったのだ。

桃ちゃんの車で帰るために、俺たちは店の駐車場にむかった。

その夜は、トナカイが凜として駆け抜けて行きそうな冴えわたった夜空に、満天の星が輝いていた。

第八話終了

第九話「拳闘無宿 四角い荒野に見えるもの」

拳闘無宿とは、故寺山修司さんが、ボクシングに命を賭けて、人生を渡っていった人々に敬意を込めて言った言葉です。

二〇〇七年の十二月十一日（日本時間十二日）、今年のボクシングの

殿堂入りメンバーが発表され、評論家でマツチメーカーのジョー小泉氏（六〇歳）が選ばれた。日本人の殿堂入りは2階級制覇王者のフアイ

ティング原田氏に次いで史上二人目。今回は元世界ヘビー級王者のラリー・ホームズ氏ら計十二人が選出された。殿堂入り式典は六月八日、

ニューヨーク州カナスタータで行われる。

という記事が各新聞に載っていた。

俺は、毎週WOWOWの「エキサイトマッチ世界プロボクシング」を観戦しているが、一九九一年以来続く長寿番組であり、世界のボクサーのすごさに触れられるこの番組の放映時間の月曜の八時は、一週間の中で最も楽しい時間の一つである。この番組の中で、的確なボクシング技術の解説や世界のボクシング界の様々な情報を教えてくれ、さらに英語やスペイン語の同時通訳もこなすというのがジョー小泉さんで、一言で「すごい」人だが、番組の終わりに絶対に「ダジャレ」をいうことでも知られている。

この番組を何で見だしたかというと、桃ちゃんの影響である。

桃ちゃんは女の子にも関わらずボクシング好きで、それもマニアに近く、けっこう古いボクサーも知っていて、どこから買ってきたのか、

「輪島功一 炎の男」という世界チャンピオンから二度陥落し、その

たびに王座に復帰した世界ジュニア・ミドル級チャンピオン輪島功一さんの現役時代の全世界タイトルマッチが見れるビデオを持っている。

十年前そのビデオを桃ちゃんが貸してくれたというか、無理やり家に置いて帰って、三日後に感想を聞くから三百字以内でまとめておくように、なんていうので仕方無しに見たのだが、これが面白い。このビデオがきっかけで俺もボクシング好きになり、「エキサイトマッチ」

を見だすようになったわけだ。

輪島さんは七十年代に活躍した人である。

二十五歳でデビューという遅咲きの人で、それもジュニア・ミドル級（69・853kg）という世界的に層が厚く強打者揃いの階級の中にいたの

だが、相手の動きを見切る武芸者のような体のさばきと、機を見て相手から打たれることを恐れず、接近戦で相手を倒す勇氣によって世界チャンピオンとなり、そのあとも多くの難敵と戦い名勝負を繰り広げてゆく。

構成的には輪島さん自身の自戦記のかたちで様々な解説が織り込まれているので、素人にも充分にボクシングの奥深さを味わえる作りになっている。

輪島さんはプロボクサーになって三年目の二十八歳の時、一九七一年十月三十一日、東京・両国の日大講堂で世界初挑戦。WBA・WBC世界J・

ミドル級王者カルメロ・ボッシ（イタリア）に挑む。ひざまずくような格好から次の瞬間、跳ね上がりながら相手のアゴに拳を振り上げる「かえる跳び」やパンチの当たらない距離で突如フラフラになった格好をして相手に近づき殴りかかりたりするなど変幻自在の攻めで技巧派の相手の技を封じ十五回判定勝ちで世界王座奪取に成功する。その

後、通算六度の防衛に成功。

一九七四年六月四日、オスカー・“ショットガン”アルバラード（米国）を挑戦者に迎え、七度目の防衛戦を行うが、最終十五回KO負けを喫し、王座陥落。王座陥落から七ヵ月後の一九七五年一月二日、アルバラードと再戦。十五回判定勝ちで雪辱しWBA・WBC王座返り咲きに成功。三月にWBC王座を剥奪され、以後WBA王者。六月七日の初防衛戦で柳済斗（韓国）に七回KO負けを喫しWBA王座陥落。だが、翌一九七六年二月十七日、柳と再戦し十五回KO勝ち。

二度目の世界王座返り咲きを果たす。五月初防衛戦でホセ・デュラン（スペイン）に十四回KO負けを喫し、三たび世界王座から陥落。一九七七年六月、三度目の世界王座返り咲きを懸け、WBA王者のエディ・ガソ（ニカラグア）に挑むも、十一回KO負けを喫し、結局この試合を最後に三十四歳で引退する。

最終戦績は三十一勝（二十五KO）六敗一分。七十四年の最初のアル

バライト戦以後の六戦で四度のKO負けを喫するもその倒れても倒れても起き上がるファイター振りは、最後まで観客を酔わせた。

輪島さんは場外戦も全力で、特に有名な話が柳済斗との再戦の時、風邪を引いて体が弱っているという噂をながし、その試合直前までの輪島さんを追い、試合後ドキュメンタリーとして流したNHKの取材班にもマスクをかけてだまし続け、柳済斗との記者会見でもマスクをして幾度も咳き込み、相手を油断させようとしたことである。利用するものは全て使い、勝つために全力をつくす、傍目にはほとんど喜劇なのだが、笑うものは笑えとばかりの演技に誰もが引かなかったのである。ここまでくると戦国時代の日本一の策士、毛利元就も真つ青ということになる。

ビデオ「炎の男」の終わりで輪島さんは、「勝負は「勝つか」「負けるか」と書くんだ。結果なんて気にしてたら、試合はできない。自

分が燃え尽きるまでリングに上がったんだ」とおっしゃっていた。

アーネスト・ヘミングウェイの小説「勝者には何もやるな」の冒頭に次のような一節がある。

「勝者には何もものをも与えぬこと——その者にくつろぎもよろこびも、

また栄光の思いをも与えず、さらに、断然たる勝利を収めた場合も、勝者の内面にいかなる報償をも存在せしめないこと——である」

まさに輪島さんは、リングという正方形の荒野の中で、勝者となりつづけるために、休むことなく努力を続け、くつろぎも栄光への思いも現役時代にはなかったはずだ。リングという荒野の中を彷徨しこれ以上はボクサー生活を出来ないと自分で納得したとき、グローブを置いたのだ。最後の試合でもいつものように失神寸前の状態まで頑張

り、そしてKOされ、敗者としてリングを降り勝負師の生き様を示してくれた。

ボクシングにとって「強さ」は論理だが、「戦い」は思想である。

ボクサーの「強さ」は、あくまで相手との相対的だが両者にとっては、絶対的な違いであり、各種の対戦までのデータから割り出せるものである。

しかしながら、「戦い」は一对一の鍛えに鍛えた者同士が、各々のそれまでの直接的にか間接的にか得てきた経験から生れる思想の衝突である。

輪島さんは「勝負師」としての思想を己の肉体で具現化し、「ボクシングにとって「強さ」は論理だが、「戦い」は思想であるというテーゼを実証してくれた。

つれづれにそう考えてきて、思い出したのが、今年の十月にあったWBC世界フライ級タイトルマッチ 王者・内藤大助対亀田大毅戦である（王者が3-0で判定初防衛）。

亀田が前代未聞の反則技をこれでもかとだして問題になった試合であるが、試合前から亀田選手が記者会見で「ゴキブリに分析もくそもあるか。ゴキブリ退治、ゴキブリホイホイや」と王者を見下せば、内藤も「ゴキブリのオレに負けたらゴキブリ以下だからね」と応戦するなど舌戦やパフォーマンスで大いに盛り上がった試合でもあった。

この試合も「思想」戦であるのはいうまでもない。

同じ葛飾区の歩いて十五分くらいの所に内藤の所属する宮田ジムも亀田の亀田道場もあるのだが、距離は近くても互いの思想はまったく対極にあるものだった。

内藤は、タイの天才ボクサーとして有名なポンサクレックに二度敗退も、二〇〇七年の七月に三度目の正直で撃破し三三歳で世界チャンピオンとなった苦労人であるのに対して、亀田大毅はまだ十七歳ながらテレビ局の力を背景にのし上がってきた亀田一家の次男である。

試合はラウンドがすすむにつれ、内藤の技術の高さと亀田の若さの差が始め、四ラウンドごとに判定結果を公表する試合形式だったことも重なり、敗勢が明らかになった十二ラウンドに亀田はタックルや投げ技をだすなどの反則技を連発、試合後マスコミなどから非難を受けた。

疑問なのが、なぜ亀田が想像を絶する反則を平気で次から次に行っていたかである。もし悪いことをしているという感覚があるなら、またボクシングをしているという感覚があるなら、衆人環視の前で、前代未聞の反則などできるはずがない。試合後は内藤のマナーの良さがたたえられることになるのだが、おそらく亀田は最後はボクシングをしているという感覚はなく、（どうせ負けるなら派手なことをしてお客さん

を喜ばせないとお客さんに悪い）、と思っていたような気がする。

ボクサーは人間と戦う。

だからこそ相手を敬う精神が尊ばれるが、もし十二ラウンドをマスコミや視聴率や人気、そして金銭と戦わなければならなかったら、まさに幻想の十二ラウンドであり、視聴率や人気のためにボクサーとし

ての思考は停止して自滅に至っても亀田にとっては当然の論理の帰結であつたろう。事実、この試合は三十パーセントの視聴率をとつたのであり、亀田は「仕事」を見事にこなしたのである。

コマーシャルリズムという言葉がある。商業主義とか訳され、金銭第一の考え方を指すのだが、まさにコマーシャルリズムを体現化したのが亀田であり、長いボクシング生活の中で得てきたスポーツとしてのボクシングの作法を体現化したのが内藤なのだ。だから、内藤選手も亀田選手も互いの思想を完璧にだしきつたのであり、単なる道徳的観点から亀田選手を非難してもしかたないのである。「勝負は勝つか負けるか」だし、「戦い」は各人の思想を表現できれば良いのである。

内藤さんは内藤さんの思想を表現し、大毅くんは大毅くんの思想を表現したのだ。

ところで冒頭のジョー小泉さんだが、実は小泉さんはボクシングの対戦歴をもっていないボクシング評論家である。

一九六四年、十七歳の高校三年生のとき、アメリカで発行されている世界的権威のボクシング雑誌「リング」を読んでいて、同誌の編集長である「ミスター・ボクシング」ナット・フライシャーの執筆記事に間違いを発見、手紙で本人に指摘したことが縁で、「リング」誌東洋地区通信員となった。フライシャーさんはまさか十七歳の高校生がアメリカまで手紙を書いてくるとは思っていなかったようだ。以後、「リング」誌にレポート記事を掲載するが、その間、神戸大学工学部を卒業、一流企業に入社、エンジニアとして勤務の傍ら、国内外のボクシング雑誌への寄稿、テレビ解説者、そしてトレーナーと多彩な活動を展開、一九八五年には会社を辞め、ボクシングに専念して現在に至っている。語学の達人としても知られ、理論派で冷静沈着にみえるが、ものすごいダジャレ好きでもある。

今年、日本で修業している若きボクサー、ホルヘ・リナレスの世界チャンピオン決定戦でリナレスが十ラウンドに相手をマットに沈めた瞬間、「やった、やった」と子供のように喜ぶ小泉さんの声がテレビ

から聞こえてきて、熱い思いをボクシングに、いや「拳闘」に抱いている人だと思った。

安定した職を捨て、四角い荒野をさすらう道を選んだ小泉さんは、まさに寺山さんのいう「拳闘無宿」の一人であり、それだけでも殿堂入りの資格を有する人であったのだ。

第九話終了

第十話「鳩と羊とネコ様と」

第十話「鳩と羊とネコ様と」

「ちよつとメタボン聞いてよ。今日ね、子和歌公園に散歩にいったのよ。すると超シヨックなことがあったの」

新年早々の桃ちゃんの携帯からの電話だ。

俺はこつちから電話をすぐにすると言って、携帯を切り、固定電話で桃ちゃんに電話をした。

女に電話賃は払わせられないのだ。

「もうびつくりしたの」

「痴漢でもいたの。あの、ほらコートの下には何も着てないハゲ男とか」

「そんなのじゃない。メタボンの発想も最低だけど、もっと最低のことなの。公園のベンチに二人の中年男がいて、一人は柄の長い網を持っていて、一人はパンくずを回りにバラまいてたの」

「まさか、食糧難」

「そう、うーん、食糧難なのかは分からないけど、とにかく鳩がパンくず目当てに集まってきたら、網をかけるの。一回で一羽か二羽はかかってそのままマジソンスクエアガーデンバッグにいれてさ。私が見ただけでも七羽はバッグにいれた」

「あのマジソンスクエアガーデンバッグをそんなことに利用してたの」

「そうよ。だから私、お前ら何してんだ、鳩を解放しなさい。君たちは包囲されているって言ったら、そいつら驚いた顔で私を見てさ、そう鳩が豆鉄砲食らったような顔ね、ウンあれだ」

「そいつら、桃ちゃんに向かって来なかったの」

「来た来た、だから前蹴りの型を見せたらビビッて逃げてや

がんの、ケツ」

桃ちゃんは北斗七星拳という怪しげな拳法道場に通っている。その道場は、北斗七星拳本部道場という看板をだしているが、全国に道場は一つしかなく、その道場のみである。現在の会員数八名。桃ちゃんは筋が良いそうで、女の子ながら師範代を務めている。まあ、ほかの会員が、高齢者と幼稚園児しかいないのだが。

「そのあとは」

「逃げ出した奴らに、その鳩どうするのって聞いたら、背中越しに振り向きながら、食べるんだよと言ったの」

「食べるの」

「そう食べるんだって、公園にいる鳩を。もう信じられなかった」

桃ちゃんは逃走する男たちを横目に公園を管理する役所に電話して、鳩泥棒がいると報告し、警察に言うべきかどうかのアドバイスを求めたという。

公園管理の者は、鳩は役所が飼っているものではないし、動物愛護条例を作っているが、警告と罰金五千円以下くらいで、こちらから警察に報告だけはしておくから、あとは役所にまかせてほしい、わざわざ連絡してくれて感謝しているということ、役所のほうから電話を切ったという。

「役所の奴もいい加減だな。あの税金泥棒。しかし、別に役所が所有している鳩じゃないから、公園の鳩をかつぱらっても窃盗罪にはならないな」

「法律は法律よ。あんな可愛い鳩を殺して食べるなんて、残酷すぎ。それに矛盾したことになるけど、健康にも悪そう。だっていろんな菌を持ってそう」

桃ちゃんの怒りを静めながら電話を切ったあと、桃ちゃんはないか先入観で、文化という色眼鏡で鳩をみているような

気がした。

世界には鳩を食する民族は多い。ネットで「鳩料理」と打ち込んで検索すれば、二千件近くの検索結果が出るくらいだ。たとえばフランスで鳩料理といえば、高級店でしか味わえない高価な料理だそう。羽をすっかりむしりとって、骨とくちばしを飲むような真似をしなければ、そう健康にも害はないし、鳩に限って有害な菌が多ければ、誰も鳩料理など食べるわけがない。

つまり公園の鳩を取って食べても法律的にも衛生的にも何の問題もないわけだ。

桃ちゃんは「あんな可愛い」鳩を食べるなんて言ったが、われわれは「可愛い」動物を人間の生存のために殺して、それを食べてなんとか生きているのだ。家で熱帯魚を飼ってる人間が、水槽の管理には真剣になっても、同じように海を泳いでいる、マグロの刺身を食べ、太刀魚の天ぷらに舌鼓を打っている。羊を見た人は、みんな羊のことが好きになると思う。温和な気性で、人なつっこく、たまにメエーと鳴くくらいだ。羊が人間を襲ったとか、殺人羊が現れて、地元猟友会と警察が必死の捜査をしているとか、聞いたところがない。しかし、われわれはジングスカン料理という名で、羊の肉が焼けてその油が飛び散る中を、勇猛果敢に箸を鍋にいれ、小さく刻まれた肉をつまんで口に入れる。そのとき、可愛い羊ちゃんごめんね、などという人間がいるわけがない。

逆に、日常のペットで危険といえば土佐犬だが、あんな危ない犬はいないぞ、食ってしまえという日本人はいない。そんなことを言ったら、「お前、犬食うのかよ。最低だな。それでも人間か」と一生言われそう。だが世界的に見れば、犬を食す文化は存在する。だが犬は可愛いペットだと一方的に考える欧米の国々もある。お隣の韓国では二〇〇二年の日韓ワールドカップの時、アメリカの動物保護団体が、「犬を

食うような野蛮な国でサッカー大会などもつてのほか」と抗議があつたくらいだ。

どちらが野蛮かの答えは簡単で、文化はそれぞれの地域で異なるもので、ある文化が絶対的に優れているとか、劣っているとかの比較が出来ないものだ。特に食文化は文化の中の文化といつても良い。欧米の動物保護団体はその点が分からず、一方的に自分の文化で相手の文化を攻撃する。当然、文化の意味も知らない欧米の方が野蛮なのだ。

そうそう、そういえば競馬好きの寿司屋の政が、競馬で勝つてその力ネで馬刺しを食べて、それ以後一年間競馬の予想が当たらずに、お馬さまの呪いだと言っていたことがあつた。毎週毎週飽きもせず馬券を買い、俺の愛馬はなあとか言つても、馬刺しを食べるのが人間だ。

中国などでは生きているものは何でも食えるという発想らしいが、その中国ならいざしらず、日本ではネコを食べたという話はきかない。それはネコが可愛いから、という論理はもう破綻していることは、読者も了解してくれると思う。

ではなぜネコを食べないのか。羊と牛とネコを比べてネコだけがおとなしくて優しいとはいえない。桃ちゃんの飼っている「マオ」というネコは別だが、普通ネコはネズミなど自分より弱いものをなぶり殺しに近い形で殺す。実際に私は数分間ネズミをもて遊んだ上に……を見たことがある。また飼い主がいくら愛情を注いでも、お前は誰よってな顔をしてノシノシと家の中を歩くし、なついていると思つて抱こすものなら、人間様につめを立てたり平気です。では、牛や馬や羊や鳩は食べるのに、日本人はなぜネコを食べないのか。牛料理も馬料理も羊料理も鳩料理もレシビはあるのに、なぜネコ料理のレシビはないのか。

答えはネコの首の鈴をはずすのが難しいからか。
そんなはずはない。

答えは日本文化の中にネコを食べる習慣がないからだ。そしてその文化はわれわれ日本人の脳細胞を抑制し、ネコを食べるなんて恐いね、あの国の人たちって何するかわからないよねという論理になっていく。文化に人間は規定され思考は制限される。文化を尊重しながら、文化の枠を超える思考が重要なのだ。へえー、あいつら豚肉恐がってんのか、臆病者だなとか、牛肉食えない民族かよ、よく栄養失調で死なないもんだ、などと言いついたら終わりである。

最後に俺は、公園で鳩を捕獲することを奨励しているわけでも、ネコに恨みがあるわけでもないことを付け加えておく。

第十話終了

「小説家になろう」削除規定があつたんですね

今回は「なろう」の削除規定の紹介です。こんかいのは純粋なエッセイではなく、「なろう」の酷評規定です。

「小説家になろう」削除規定評論エッセイです。

こんな規定あつたら、削除楽ですよ。評価ラン下にありました。説明順序は入れ替えています。

作者に対する中傷（減点評価・加点評価いずれも）

例：この作者はアホだ！ や 才能なさすぎです。

連載しない方がいいんじゃないですか？ など

命令調・攻撃的な言葉などで書かれている評価（減点評価・加点評価いずれも）

例：もつと勉強しろ！ や 次はこうしろ！ 死ね！ 連載やめろ！ など

正論でない場合。あきらかにおかしい評価（減点評価・加点評価いずれも）

例：例えば、誤字脱字はないのに、誤字脱字がある

と言いがかりをつけている場合。また、違う作品に対する評価。

・減点理由がはっきりと書かれていない評価（減点評価の場合のみ）

例：もつと勉強してください。 や つまんなかったです。としか書かれていない場合。

固有名詞を含まない評価（減点評価の場合のみ） 小説には通常、多くの固有名詞が登場します。たとえば、登場人物名や地名などがその代表例です。内容を批判しているのに、固有名詞を含んでいない具体性にかけるものは評価荒らしと考えます。

小説本文に関しない評価（減点評価の場合のみ）

後書きや前書きなど本文に関しない評価です。

- ・ 短編小説じゃないから読みにくい。
- ・ 連載小説なんてやめてください。
- ・ 恋愛小説はやめてください。
- ・ あなた掲示板で荒らした人ですよ？
- ・ もっと短くしてください。
- ・ もっと長くしてください。

小説のレイアウトに関する評価（減点評価の場合のみ）

例：文字が読みにくい。 ルビが適切でない。 広告が邪魔。
など

作者に対する中傷はしない

「この作者はアホだ！」 や 「才能なさすぎだぞ！」 などは作者に対する中傷です。 作品に対して感想を書いて下さい。 中傷は禁じています。

・ 敬語で書く必ず敬語を使ってください。

・ 正論を書いてください。

根拠もないことを書くのは駄目です。 どこがどう悪いのか、あるいはどう良いのか具体的に書いてください。

固有名詞をなるべく入れてください。 なるべく、小説のキャラクターの名前や出てくる街の名前など、固有名詞を書いてあげて下さい。 そのほうが、作者も喜びます。

小説の文字数に関する感想はご遠慮ください。 小説家になろうは文字数制限はしていません。 文字数に対する感想を書くのはご遠慮ください。

小説のレイアウトに関する感想はご遠慮ください。 レイアウトは基本的に作者が調整できません。 レイアウトなど小説の本文以外の感想を書くのはご遠慮ください

以上に同意いただけない場合、作者によって予告なく削除される場合があります。

場合によってはブラックリストに登録されることもありますのでご注意ください。

評価する場合の注意事項

・評価理由の書き方

小説を読んでどのように感じ、なぜそのように評価したのかを書いてください。誤字脱字の指摘や日本語として間違っている部分の指摘もできますが、細心の注意を払ってください。

評価の一例（加点の場合）

主人公の田中さんの性格が気に入りました。とてもよかったです。

評価の一例（減点の場合）

犯人もトリックも単純で、推理小説としてどうかと思います。

田中さんが犯人じゃないのは最初からわかっていますし、

なにか物足りませんでした。というわけで、内容評価については

「もつとがんばろう」をつけました。あと、1行目の「彼は新だ」という部分、

10行目の「犬が身」という犬神さんの名前の変換ミスなど、誤字脱字が多いのも問題だと思います。

最後まで読んでから評価

必ず、最後まで読んでから評価してください。なお、連載中の場合は評価時点での最新話まで読み、その上で評価してください。

減点する場合

や を選んだ場合など減点評価をする場合は最低でも以下の文章ぐらいは書いて、誰もが納得できる減点理由にしてください。

減点すること必要ですが、作者に対する配慮をお願いします。

最低でも「あっさり終わってしまったのだがとても残念。

主人公を最後の戦いでもっと活躍させたり、主人公の友達たちの会話をもうすこし増やした

ほうがよかったと思います。」のように分かりやすく書いてください。

あらすじを書くのではありません。

得点をつけ、そのコメントを書くというのはあらすじを書くのではありません。どこが良くてどこが悪かったのか具体的に、誰もが読めように書いてください。

・評価理由と選択内容は同じに。矛盾しないでください。

たとえば、評価理由で「素晴らしい」というようなことを書くのであれば あるいは を必ず選んで下さい。素晴らしいと書いておきながら、一つだけを選ぶのは矛盾しています。

・固有名詞をなるべく入れてください。

や を選んだ場合の評価であればまだ良いのですが や 一つを選んだ場合は必ず固有名詞を含んでください。固有名詞とは、登場人物の名前や街の名前など、その小説固有の単語のことです

・小説の文字数に関する評価はご遠慮ください。

小説家になるうは文字数制限はしていません。

文字数に対する評価はご遠慮ください。

・小説のレイアウトに関する評価はご遠慮ください。

レイアウトは基本的に作者が調整できません。

レイアウトなど小説の本文以外の評価はご遠慮ください。

以上に同意いただけない場合、せつかくの評価が

得点として反映されなかったり作者によって予告なく 削除され

る場合があります。場合によってはブラックリストに登録されることもありますのでご注意ください。

▼ご協力をお願いします▼

小説家になろうでは信頼度を導入しています。

適切な信頼度を求めるためにも、「小説評価」から他の人の評価を見て、「この評価は参考になりましたか？」の項目で「はい」「いいえ」を投票してください

上記との関連で評価荒らし行為の基準削除

意味不明な日本語（減点評価・加点評価いずれも）

例：ああああ や あひやひやひやひや など

・作者に対する中傷（減点評価・加点評価いずれも）

例：この作者はアホだ！ や 才能なさすぎです。

連載しない方がいいんじゃないですか？ など・命令調・攻撃的な言葉などで書かれている評価（減点評価・加点評価いずれも）

例：もっと勉強しろ！ や 次はこうしろ！ 死ね！ 連載やめ

ろ！ など

・正論でない場合。あきらかにおかしい評価（減点評価・加点評価いずれも） 例：例えば、誤字脱字はないのに、誤字脱字がある

と言いがかりをつけている場合。また、違う作品に対する評価

・減点理由がはっきりと書かれていない評価（減点評価の場合のみ）

例：もっと勉強してください。 や つまんなかったです。

としか書かれていない場合。

・固有名詞を含まない評価（減点評価の場合のみ） 小説には通常、多くの固有名詞が登場します。たとえば、登場人物名や地名などがその代表例です。内容を批判しているのに、固有名詞を含んでいない具体性にかけるものは評価荒らしと考えます。

・小説本文に関しない評価（減点評価の場合のみ）
後書きや前書きなど本文に関しない評価です。

- ・短編小説じゃないから読みにくい。
- ・連載小説なんてやめてください。
- ・恋愛小説はやめてください。
- ・あなた掲示板で荒らした人ですよ？
- ・もつと短くしてください。
- ・もつと長くしてください。

こんかいのは純粋なエッセイではなく、「なろう」の酷評規定です
・小説のレイアウトに関する評価（減点評価の場合のみ）

例：文字が読みにくい。 ルビが適切でない。 広告が邪魔。 など

これらは作者レベルでは対応できない問題です。

以上の行為は評価荒らし行為とみなします。 ここでいう減点評価とは 一つあるいは

をつけた評価のことです。 文章評価と作品評価がありますが、
どちらか片方でも含む

場合を示します。

このような評価を発見したら「参考になりましたか？」の項目で「いいえ」をクリックしてください。

クリックすると信頼度が下がり、得点に反映されなくなります。

また、状況に応じて評価者が

ブラックリストに登録されます。

冬の旅はつづく 真夜中にお疲れ様 追加版

冬の旅はつづく 真夜中にお疲れ様

削除しちゃいました。

規約より

1 減点評価ばかり行ったり、評価荒らし行為であると判断した場合は 信頼度が下がります。これは 一つのみをつける悪質なイタズラを防ぐ効果があります。

2 (1つ)または (2つ)をつけ、その評価理由が具体的に書かれていない場合、自動的に信頼度が下がるようになっていきます。

3 正論を書いてください。

根拠もないことを書くのは駄目です。どこがどう悪いのか、あるいはどう良いのか具体的に書いてください

4・固有名詞をなるべく入れてください。

や を選んだ場合の評価であればまだ良いのですが や 一つを選んだ場合は必ず固有名詞を含んでください。固有名詞とは、登場人物の名前や街の名前など、その小説固有の単語のことです。

5 小説のレイアウトに関する評価(減点評価の場合のみ) 例：文字が読みにくい。 ルビが適切でない。 など

6 最後まで読んでから評価

必ず、最後まで読んでから評価してください。なお、連載中の場合は評価時点での最新話まで読み、その上で評価してください。

今回の評価さん

名前：九重 2008-01-25 02:42

エッセイだそうだがエッセイというきがしません。読みづらさの原因を考えるにどうも改行の位置が悪いのではないかとおもいました。縦書きで読めば読みやすいのかと思いきやそれでも読みにくいです。これは好みの問題ではない、と判断させてもらいました。実話系ということだが、そうするとメタボンが作者であるtouyou先生のお分身なのでしょうか？どうも意見の押し付けに思える内容でついていけませんでした。

この評価は参考になりましたか？

文章評価：

作品評価：

出版：買わない

九重産こんにちは。午前2時42分ということでお疲れ様。

エッセイだそうだがエッセイというきがしません。＞＞主観的な評価は評価といえませんか？どういふときはエッセイの定義を書いて反論してください。でないと具体的な批判とはいえなくなります。主観でかくならなら感想でよいですよ。それから「エッセイだそうだが」は命令口調ですよ。エッセイだそうですがですね。これは好みの問題ではない、と判断させてもらいました＞＞これまた主観ですよ。それと上記の5から「読みづらさ」は評価対象になりません。

エッセイだそうだがエッセイというきがしません。読みづらさの原因を＞＞まったく日本語の因果関係になっていません。エッセイと「読みづらさ」は違う次元のもですよ。お互いにべんきょうしてゆきましょう。こういう次元で星ひとつにされたのでは私を含めて作者はかけませんよ。これだけでも削除してよいでしょう。正論をかいってください。

実話系ということだが、そうするとメタボンが作者であるtouyou先生の分身なのでしょうか＞＞実話系というのは私小説ではないですよ。九重産、読まずに評価してませんか。けっこう現実の問題を元に書いてますよ。ちなみに何回目かはヴォネガットという

人のを参考にしてます。たとえば週刊実話という雑誌がありますが、あれは編集長の私的体験ではありませんし、もし編集長の体験だったら大変ですよ。ということとこれまた論外なことをお書きになつておられます。固有名詞は含まれていますが、それが一番的外れになつておられました。よかつたら真面目にすべてを読んで、的外れでない具体的な御意見をください。現実を話しにしているから実話系です。こんなことも感想でよいはずで、真夜中にお疲れ様です。とにかく正論を。

どうも意見の押し付け>>これはあなたの感想でして、評価なら客観性が必要で、もともと小説などは書き手の勝手な考えで、感想なら、私もそうでしょうねとか思いますが、評価の根拠にして星一つではなにか悪意があるのではないかと、ふつうなら勘ぐりたくなります。また具体的な説明がありませんよ。これは明確な削除理由になりますよね。といっても私は、寛大なところも少しはありますから、読者の感想におつきあいしてます。

それと九重産、「読む」ことは人間の主体的な行為ですから、そのことを忘れて読もうとしてませんか。書いてることは真実だと思ひ込んでるから、「押し付け」などといった言葉が出るような気がします。うそか本当かもしわからないなら、評価ではなく感想にするのが常識ですよ。押し付けという言葉の裏には読み手のファシズムがあるような気がしています。この意味をききたいなら、お金をめぐんでください。

以上から削除いたしました。星ひとつの段階で削除しても良いみたいですけど、公式ブログによると>>移行後は減点評価の削除は「不正得点操作どころか自ら総合評価を下げる行為」になるという点と、「荒らしと不正得点操作の定義があいまい」という点をふまえて不正得点操作による処罰は行わないことにしています。>>つまり削除したいならどうぞとかいてるわけで、しかし一応私もせっかくの評価をむげに削除するのとも思ひ書かせていただきました。

九重様 ご協力ありがとうございました。正論をお願いします。

ジャングルの闇に潜むライオンハンターもセントラルパークで眠りこけるのんだくれも中国人の歯医者もイギリスの女王もみんな仲良く同じマシンのなか。

いいね、いいね

そんなに違う人々が同じ乗り物のなか

……カート・ヴォネガット「国のない男」より引用。

右手の暖かいココアを置いて

左手のパプア煙草に火をつけた

のめるような疲労をおさえ

東の境界を越えてわたしは

イランの就職と死を想っていた。

やがて 夢の中核に

高原の夜の湖の

巨きい碧緑おおみどりの輪が

流れてくるのだ。

冬の旅はつづく

いつまでもつづく

ぴょうぴょうと吹く氷雪の嵐について

否定の旅はつづく

……長谷川龍生「冬の旅」の一節より。

琵琶湖伝第三部江湖闘魂完結編百五十三「暗器師の舞台」より

「いくら隠れても、ケダモノは匂いで分かりますぞ」

成幹がそう言った瞬間、月が雲に隠れ闇が深まった。

同時に成幹の前方に五名の人影が浮かんだのである。

補足です。たびたび意味不明のことを書き込みしてきた人がいま

す。管理人さんに報告したあと来なくなりました。灰月さんという
かたです。当然削除しました。このひとはわけのわからぬ因縁をつ
けてヤクザとしかいいようがなく、無視していたんですが、あまり
にしつこいまったくのいいがかりをつけてくるので、管理人さんに
報告したら次の日からイヤガラセをしなくなった根性無しです。信
頼度を今度は必死で下げる気もしますが、まあこの人以外に歴史
ジャンルの一人が嫉妬からやってるようです。バカにつけるクスリ
はありませんか。灰月さんはこのサイトの作者の一人です。で私が
報告したその日から、秘密基地という「小説家になろう」の協力サ
イトで評価依頼を01/28 21:04から始めて、よい子ち
やんに変身してヤクザの正体を隠すことに日夜精進しているのに大
笑いました。まあどうでもいいけどねー。

琵琶湖伝第三部江湖闘魂完結編百五十三「暗器師の舞台」より烏
丸中将成幹の言葉。

「いくら隠れても、ケダモノは匂いで分かりまするぞ」

最初はメッセ欄でした。

送信者：灰月「」

送信日時：2007/12/13(Thu) 18:27

件名：一読者として言わせていただきますはじめまして、灰月
と申します。

長つたらしい前置きは省略します。

不正をしていないと証明できていないTYさんは、確実に不正を働
いたという事になります。

これは理解できますよね？

とにかく本当に不正があつたにしろ無かつたにしろ、ウメさんが不
正を認めた以上、琵琶湖伝のあらすじかどこか。とにかく、読者に
見える形で『ご迷惑をおかけしました』など、謝罪をすべきじゃな
いのですか？

感想を隠すより先に謝罪をすべきではないのですか？

その行為は、読者に対して大変失礼です。

ちなみにですが、質問板を見た後日2ちゃんねるを見ました。が、あそこの書き込みはそこまで気にする必要はないかと思います。ただ、叩かれるのには何かしら理由があると。自分が巻き起こした事態だという事だけは理解すべきかと思います。

と、偉そうに言ってますが、間違った事は言っていないです。

自分よりレベルの低い作者に言われるかどうか。それは全く関係ありません。言っている事が合ってるか間違っているか。それが全てです。

ご意見がありましたら灰月までどうぞ。

こっちは評価欄

名前：灰月 2008-01-28 18:38

先日読者に謝罪をするように求めたのですが見た所、読者への謝罪が無いようですね。

それだけでなく、本来はエッセイの小説を載せるべきスペースで反論をしているんですね。

何て言うか、非常に残念です。点数が満点なら荒らしじゃ無い、なんて事は無いと思いますよ。自分は。

この感想も充分に荒らしなので消しても構いません。ってか消すベキです。消して下さい（ちらつと見ましたが、面白くなさそうなので、読んでいません。なので内容が分からないです（笑））。

しかし、これを消すと同時に擁護評価を消す義務が生じてしまいませんか。私も彼らも内容に関して何も言っていないのですから（笑）。

最後に。私、某巨大掲示板に一度だけ謝罪しろと書き込みました（それを書き込んだ後は、一度も書き込まないどころか、見てすらいません）。苛々して、つい書き込んでしまいました。申し訳ありません。

これは評価ではなく感想です

18歳〜22歳 男性

名前：刺客 2007-12-11 13:38

はつきり言って読みづらい。携帯を意識しすぎて変なところで切る改行が多すぎ。

しかも文法的にもおかしいところがあちこち。一番目につくのが「の最後にある。（句点）で、あるところのないところがあるのでつけないほうに統一すべきだと思う。

ま、どうせ満点じゃない評価はすぐに消すんだろうけどな。

でもそれを繰り返すと不正得点操作と見なされて逆に点が下がるから気いつけな。

文章評価：

作品評価：

出版：買わない

灰月さんのみを言うのは不公平と急に思いまして追記します。

そのスレは削除されてますが全てコピーしてました。

質問版にアラシっがひどいので、どうすべきか書いたところ、

まるで 「投稿者：紅ノ風」 投稿時刻：2007/12/11

11:58 No:2302

自分だけが荒らしにあっているかのような身勝手な書き込みです
ね。

そんなもの自分自身で削除していくしかありません。

面倒でも他の方もやっているかと思えます。

ランキング一位だからといって頭に乗ると叩かれますよ？

この記事はケータイで投稿されました。

そのあとで、

まあ・・・ 「投稿者：w4034a」 投稿時刻：2007/

12/11 16:52 No:2303

ていうか、抑作者が自分の意思でそう言うのをIPアドレスで規制出来ればよいのですが・・・。

<紅ノ風氏

叩かれると注意しときなが自分で叩いてますね

この記事はケータイで投稿されました。

質問板でおなじみの先生が助け舟をだしてくださりました。
すると

w4034aさんへ 「投稿者：紅ノ風」 投稿時刻：2007
/12/11 17:12 No:2304

スレ主に対する注意のつもりなのですが……。

この記事はケータイで投稿されました。

ランキング一位だからといって頭に乗ると叩かれますよ？って紅ノ風さんの言葉は脅しに近いと感じました。

さらに、

Re:ウメさんへのおねがい 「投稿者：ty」 投稿時刻：2
007/12/11 23:35 No:2309

w4034aさんがとうございます。

そんなもの自分自身で削除していくしかありません>>

紅ノ風さんそうですよね。早速、削除しました。

w4034aさん本当に親切なかで感謝します。

「なろう」のためにこれからもご活躍ください。

と私が返すと、

yさんへ 「投稿者：紅ノ風」 投稿時刻：2007/12/1
1 23:59 No:2310

自分の都合の悪い評価だけ消すのですね。

それで一位ですか。なるほど。

不正行為、頑張って下さいね。

この記事はケータイで投稿されました。
ということばが紅ノ風さんから。

そんなもの自分自身で削除していくしかありません。

面倒でも他の方もやっているかと思えます。

ランキング一位だからといって頭に乗ると叩かれますよ？

といった人が、削除したら不正行為だなどといいだして信じられない。

こんな珍騒動の中で、私に4日間ペナルティ。

4日あとには元にもどしてもらいましたし、このあと削除は自由となってますが、そのあと不正削除していると匿名でいつてる人が今もいます。灰月さんと同じように、何の恨みが私にあるのかいまだに不明です。

ちなみに紅ノ風さんはそのあとすぐに名前を変え、誰かと同じように評価依頼などをしていい子ちゃんぶってます。

変えた、お名前は、「陽風」さんです。何故にすぐに名前を変えたのかも不明です。

ついでにいうと意外な人が参戦。

Re:ウメさんへのおねがい 「投稿者:坂田火魯志」 投稿時

刻:2007/12/12 01:21 No:2313

ちよつと拝見させて頂きましたが、tyさんとW4034aさんは落ち着かれた方がよいと思います。これ以上はここでのお話にはならないでしょう。お止めになられるべきだと述べさせて頂きます。

どうしてW4034aさんまでに注意したのか、さすがのあの読解力と思いました。当然寝ましたから止まっていたのですが。朝見てびっくり。

Re:ウメさんへのおねがい 「投稿者:monopo」 投稿

時刻:2007/12/12 07:04 No:2315

不正行為、頑張って下さいね。「投稿者:紅ノ風」に坂田さんはいくべきでtyさんとW4034aはおちついてますよ。。。

こういう方もいると安心しました。
そのあとこの質問スレは削除されました。スレ違いといえはスレ違
いでしょうから。

読まずに死ねるか 読んで読んで読みまくる

読まずに死ねるか 読んで読んで読みまくる

琵琶湖伝という歴史ファンタジーを書きながら、小説への自分の読書経験のなさを感じていた。ここ十年、読んだ小説といえば、乃南アサさんの「凍える牙」など数冊のみ。で、時間を見て集中的に本を読もうと思っていたが、この年末やっとそれが出来、それからいまだに本を読んでいるのだが、更新もしてないのも悪い気がしてきて、この二ヶ月どんな本を読んできたかを書き留めることにした。

小説の書き方

どんな本を読むか。まず浮かんだのが、ハウツー物。ネットで検索して研究。そこで検討の結果、古本屋めぐり、及び新刊で買ったのが、

デイン・R・クーンツ「ベストセラー小説の書き方」(朝日文庫) 価格756円とアメリカ探偵作家クラブ「ミステリーの書き方」(講談社文庫) (文庫) 価格650円。ネット検索やアマゾンなどで調べた、この調べるのが楽しい、のだが、とにかく安い。

特に前者は古本屋で350円で見つけて涙、涙。意外と書き方物は高いのだ。

クーンツって人はモダンホラー作家のステイブン・キングと比べられることも多いといわれているようで、Sキングの名前くらいは知っているので、クーンツも偉い人だと思う。クーンツの名を不動の物とした作品は1980年に発表した『ウィスパーズ』というのだそうです。ネットでそう書いてた。で「ベストセラー小説の書き方」の内容だが、アマゾンの紹介文。

「どんな本が売れるのか? 超ベストセラー作家が、自作をはじめ、

さまざまな例をひきながら、成功の秘密を説き明かす。何百万もの読者に支持される人気作家ならではの、それ自体が一つのエンターテインメントとなるように計算された好読み物！巻末に読書ガイド「読んで読んで読みまくれ」添付」。ちょっとついでに補足すると、物語の組み立て方、アクションの大切さ、人物造型といった点が361ページの半分くらいを占めているので勉強になる。

また「ミステリーの書き方」だがなんせアメリカ探偵作家協会つてのが書いたんだから、何か良く分かんが、闇金協会とか中央競馬会とかに比べたらまともな協会ではないかと考え、その協会が「書き方」を教えるならおいしそうと、欲望のままに買った。アマゾンの紹介文。

「アメリカの売れっ子ミステリー作家たち、ジョン・D・マクドナルド、レックス・スタウト、スタンリー・エリン、ロス・マクドナルドラが、自分たちの企業秘密を公開。作家志望者には座右の書。読者には、作り手の手の内がよく分かって謎解きが一段と鋭くなり、ミステリーが十倍面白く、楽しくなる、必読の書」とあった。必読ですよ、買っしかない。

補足を加えると、アメリカ探偵作家クラブ Mystery Writers of America (MWA) とは1945年に、ミステリーの普及、ミステリー作家の地位向上、利益の保護・推進などを 目的として設立された団体である。現在、アメリカ国内に九つの支部をもち、会員が2600名以上いる世界最大のミステリー団体。エドガー賞はMWAが主催するミステリー賞で、前年度に出版された広義のミステリーの中から、MWAによって任命された会員が選定を行い、作品の質や技巧をも考慮した優れた作品に与えられる。毎年、春に行われるMWAの年次大会で発表。最初は処女長篇賞などであったが、次第に賞が増え、現在は多数の部門賞をもつ名実ともに世界最大のミステリー賞となった。受賞者にはエドガー・アラン・ポー像が与えられることから、MWA賞とか《エドガー賞》と呼ばれる。

で内容は、ジョン・D・マクドナルド、レックス・スタウト、スタンリー・エリン、ロス・マクドナルドといった人々がそれぞれの担当分野で丁寧^に教えてくれる感じ。かなりアメリカでは偉い作家のようで、ただ、一昔前のお偉いさんみたいです。といってもさすがに手練の方々の説明だけに頷くことが多い。目次の一部を書くと、プロットの組み立て方フレドリック・ブラウンストーリーの構成法ホーリン・ブルームわたしはアウトラインをつくらない（ヒラリー・ウオー）状況設定からプロットづくりへ（デイナ・ライオン）いつ、どんなふうにして書くかシリーズ物と単ヒラ発物リー・ウオーてな感じ、良かったです。

このときアメリカ探偵作家協会というのを知ったのが、大変ヤバイことで、では実際どんな本を読もうかと考えたとき、この協会の受賞作を読もうかと、最初は気楽に思い、どれにしようかなと思っているうちに、すでに2月も中旬になり申した。本当は日本の売れっ子作家を読むべきだとも思ったのだが。

傑作を探せ

海外ミステリ総合データベース「ミスタス」 作家の読書道 週刊文春ミステリー などのサイトで研究。

「鳴門秘帖」吉川英治1923年刊。

「他国者は容易に近づけない、密国阿波に潜入した幕府隠密・甲賀の宗家、世阿弥が消息を絶って10年。家名の断絶を目前にして、悲嘆にくれる娘のお千絵を見かねて、法月弦之丞が阿波渡海をはかった。だが夜魔昼魔、お十夜孫兵衛、見返りお綱が二人の邪魔に入る」日本冒険小説の祖といってもよいと思う。キャラも含めて斬新です。まさに歴史ファンタジー。これは是非読みたかった。

「甲賀忍法帖」山田風太郎1959年刊。

甲賀卅谷と伊賀鰐隠れに潜む各一族の決戦を風太郎の繊細綿密な文章が妖美すら交えて描くが、時折みせる詩情豊かな文は風太郎の作家としての資質の豊かさを感じさせる。個人的には螢火のファン。6回目の再読。

上記の二作は日本の冒険小説で歴史的な作品と勝手に考えてます。

深夜プラス1／ギャビン・ライアル ハヤカワ・ミステリ文庫

1965年に発表されたギャビン・ライアルのアクション小説の名作にして古典とどこのサイトでも高評価。各所に張られたさりげない伏線、洒落た会話や意外な真相など、様々な魅力を兼ね備えた傑作としていまでも読みつがれている。ドライバーとガンマン、大富豪とその秘書という全く知らなかった人間同士が出会い警察や見えない敵の攻撃をかわしながら、互いの存在を分かち合う仲となるがといったアマゾンの紹介文。

この作品は最優秀英国作品賞受賞作品である。どの本を読んでも、冒険小説にあるがちな戦争やスパイとの関連が希薄なロードアクション一本で押し通した古典的傑作と全ての本で激賞されていた。まさに目的地に向かいひたすら道を急ぎ、これで終わりまで大丈夫かと思ったが、様々に設置された舞台が機能して、あつというまに読ませてくれた。確かに傑作でした。主役はドライバーのケインだが、用心棒役で同乗するロヴェルがいい味だしていた。

アメリカ探偵作家協会MWA賞最優秀長編小説賞の中から、読むべき作品を探した。

悪党パーカー／人狩り（ハヤカワ・ミステリ文庫） リチャード・スターク（著）、小鷹 信光訳 価格609円

「ベストセラー小説の書き方」巻末の読書案内でほめていた作家の作品の一つ。とにかく簡潔な文体で、最初から詐欺はするし、死んだ女を切り裂くわと何ちゃこいつは、でも悪党パーカーだからこんなもんかと思っっているうちに、物語はどんどん進む。展開の速さで読ませる手法も悪くない。250ページしかないのも気に入った。まさにハードボイルド。読み終わって、1962年の作品だったことに驚いた。悪党パーカーは20作以上のシリーズでいまだに書かれているようです。スタークはドナルド・E・ウェストレイクとい

う作家の別名だそうで、スターク名の作品ではMWA賞最優秀長編小説賞は受賞していませんが、ウェストレイク名での受賞歴があります。

惜別の賦（創元推理文庫） ロバート ゴダード（著）、
（原著）、越前 敏弥（翻訳）価格861円1999年 MW
A賞/最優秀長篇賞 候補。

このゴダードさんもネットでけっこう名前がでてくるので、調べたら候補作品があり読んでみた。推理小説ですが、登場人物が多数出てきて一見混乱しそうなのですが、越前さんという翻訳家がうまいのかスラスラ読んでゆけます。エッ、アッそうか、でも、なるほど、えーとこの人は、うそだろ、さらに背負い投げかよって感じでした。面白かった。かなり綿密なプロットを作り、一文一文に細かい配慮を見せながら一生懸命書いたのね、と分かるところがスタークのように俺は努力のあとは見せないからねというのが対照的で、どちらも作者の個性で勉強になりました。ただ惜別の賦でも500ページ一巻で、処女作で評判のよい「千尋の闇」以下彼のは上下二巻が多く、努力しちゃうからを1000ページも読むのはつらいのではとも思いました。千尋の闇ちいろもこのあと読みましたが、結論というか小説の方向性がこっちに読めてきて、また歴史上の大事件ともいえず途中で読むのを放棄しました。ヒマがあつたらねです。ちなみに「千尋の闇ちいろ」は古本屋で買ったので、損害を最小限にとどめました。MWAからはあと4冊読んだのですが、悪口書いても仕方がないので。

幻の女（ハヤカワ・ミステリ文庫ウイリアム・アイリッシュ
（著）、稲葉 明雄訳。価格840円 452ページ。

この作品はこのベスト10でも3位以内に入ってる作品で、読むしかないと思って読みました。1942年の作品で日本なら昭和17年。太平洋戦争真っ盛りの時代にアメリカではこんな素晴らし

い作品が発表されていたとは。どうせ主人公は助かるだろう、と思いつながらもグイグイ引き付けられていくプロットの巧みさとリリズムに溢れた表現に参りました。MWAでは49年に最優秀短編賞を受賞していて、短編の名手でもあったようですが、その短編の技術が遺憾なく発揮されています。MWAは45年に設立されたので42年のこの作品は無関係ですが、もしMWAがもっと早く設立されていたら、最優秀長編賞を受賞していたか悪くて候補にはなっていたのではと考えさせるくらいの面白さでした。こんなのも読まずに小説を書いていた自分が恥ずかしい。

グリーン家殺人事件 (創元推理文庫 ヴァン・ダイン (著) ,

井上 勇 (翻訳) 価格714円。ホームズやポワロは知っていましたが、ファイロ・ヴァンスという名探偵は知らなかった。すごいです。アマゾンの紹介「ニューヨークのどまんなかにとり残された前世紀の古邸グリーン家で、二人の娘が射たれるという惨劇がもちあがった。この事件をかわきりに、一家のみな殺しを企てる姿なき殺人者が跳梁する。神のごときファイロ・ヴァンス探偵にも、さすがに焦慮の色が加わった。一ダースにのぼる著者の作品中でも、一、二を争うといわれる超A級の名作」。宣伝に偽りなし。この作品を読んだら推理小説の評価基準が高くなって、ほとんどのが、もう一歩かなと思うかも。1928年の作品。

魔道士の掟 1 探求者の誓い―「真実の剣」シリーズ第1部
ハヤカワ文庫 テリー グッドカインド (著) , 佐田 千織
(翻訳) 以下魔道士の掟 5 白く輝く剣までの全5巻で第一部の終了。

ゲームやって登場した魔道士を題名にしたこの本は何だと1と2を読んだのだがやっと全部読めました。アマゾンの紹介。1 探求者の誓い「父を惨殺された森の案内人リチャードは、悲しみに打ちひしがれていた。犯人の手がかりを求めて森をさまよううち

に、魔法の国との“境”近くで偶然ひとりの女性の命を救う。彼女の名はカーラン。遠い昔に姿を消した偉大な魔道士を見つけるため、魔法の国からきたという。彼女とともに魔道士を探す途上、リチャードは父を殺した邪悪な魔王の恐るべき陰謀と、自らが持つ大いなる力を知った！新感覚ファンタジー巨篇、堂々開幕」

5 白く輝く剣「悪の魔王ダークン・ラールの野望を打ち砕くため、長く苦しい旅を続けてきた探求者リチャード。ついに求めていた“箱”を手に入れるが、喜びもつかの間、敵の罠にはまり、捕らえられてしまう。一方、そのことを知ったカーラン、ゼッド、チェイスの3人は、救出のためラールのもとへと向かう。敵の攻撃をかいくぐりながら、ようやくラールの宮殿にたどり着いた彼らが目にしたものは！？第一部、感動と衝撃のフィナーレ」といったもので、世界設定や背景を丁寧につけた上での、恋と冒険と剣と魔法に個性的な人物を絡めて、しかし展開そのものはそう複雑ではなく、エンターテインメント性が強い面白い作品です。

もっというと去年本屋で立ち読みしたとき、他のファンタジーより、波長が合いそうと思ったので1を買ったのですが、まさか第一部だけで5巻もあったとは。でもやっと読破できました。

まだまだ年末から今日までの読んだ小説はあるのですが、きりがないので、これくらいにします。集めてまだ読んでないのも15冊ありますが。読んで読んで読むしかないと思っています。

WEB本の雑誌というサイトに「私の読書術」というコーナーがあり、作家の方々の読書経験が連載されてます。やはりみなさんものすごく本を読んです。その中でも特に本マニアと思ったのが桜庭一樹さんという方で、

どれくらいのパースで読まれているんでしょう。

桜庭：私は規則正しい生活をしていて。昼前に起きて夕方まで書いて、その後出かけて、帰ってきてから1、2冊読んで寝るんで

す。一定量書いて一定量読んで一日が終わる、という感じです。作家になる前となった後では、読書スタイルは変わりましたか。

桜庭：前は娯楽で読んでいたけれど、今はどうしてこういう風に書いたのかな、と考えるようになりました。この一行は後から直して入れたのかな、とか。自分も後から入れたときは、そこだけ浮いていないか気になるので。当たっているか分からないけれど、いろいろ考えながら読んでいますね。

といったお話を読ませてもらうと、読まずに死ねるか 読んで読んで読みまくなという思いがさらに強く心の奥底の基盤の部分から噴出してきています。

第11話「愛はリトルレインなのだ」前半

第11話「愛はリトルレインなのだ」前半

白石裕子は、激しく降る冷たい三月の雨の中を、職場に向かつて歩いていった。

時刻は午前八時。

そう急ぐ必要もない。

循環する季節の中で再びめぐってきた、春の雨に打たれた冷えた体を暖めようと、コーヒーショップに入った。

カウンターでカフェラテを受け取り、店の奥のやつとカップが置けるような小さなテーブルに向かい、パーカーを脱ぐと壁にかけ、その壁を背にして座った。朝食でも食べようかという時間なのに、あまり客がいない。裕子のまわりの席も空いていた。大切そうにカップを両手で包むように持ちながら一口飲んで、ふと頭を上げたとき、空いているカウンターの脇の通路を歩いてくる一人の男性の姿が眼に入った。瞬間、胸の鼓動が高鳴るのを感じた。

「孝夫さん」

裕子はつぶやいた。

そのか細い声が聞こえたのか、男は不思議そうな顔をして裕子の顔を見返した。

そして確信が持てたように裕子の席に近づくと立ったまま、

「久しぶりだね」

と懐かしそうに声をかけた。

夢を見ているような、少し気後れの交じった思いで、裕子は相手への返事が出来ない。

「ここに座っていい」

彼は裕子の向かい側の席に座ることの許可を求める。

手には朝食のセットのプレートがあった。

「ウン」

裕子の答えに彼は腰を下ろした。

「君も朝食をとらないか。卵が好きだったよね。スクランブルエッグか何か」

「カフェラテだけでいいの。気を遣ってくれてありがとう」
「こんなところで君に逢うなんて嘘みたいだよ」

彼は裕子の顔を見つめた。

裕子は白いものがちらほらと交じり始めた髪を染めてこなかったことを悔やんだ。

雨に濡れたとき化粧がどこかはがれてないか気になった。

「本当に久しぶりだね。よく僕だってわかったね」

「そっちだってよく私って」

彼は声を立てて笑った。

「君なら、百年先に会ってもわかるよ」

裕子は含み笑いをした。

「昔と同じね。大げさなんだから」

飲もうとしたカップを見ながら言って、それから訊ねた。
「その後、どうしてらしたの」

「何もかもうまくいったよ、といたいけど食べるのに精一杯かな。君におごるくらいのお金はあるけど」

「風のたよりに聞いたんだけど、結婚されてお幸せになったと」

「結婚はしたんだけど、もう七年前に離婚したよ。貯金の半分くらいをかつさらわれたよ」

「お気の毒様」

「何が気の毒なものか。世の中をみれば気の毒だらけだよ。まともな人間を探すほうが大変だろ。よくある話さ。ちよいとマッチをすると、やけどをしそうなのが今の世の中さ」
彼はトーストをちぎって口にいれてコーヒーをすすった。

「君こそどうしてたの」

「夫が死んで、子供もないの」

「不幸は誰にでもくるのかな。僕の青春の女神にも」

「今は市役所の嘱託で、市役所の近くの図書館に勤めさせてもらっているの」

「君は僕が海外勤務に言ってる間に結婚したんだよね。友人の電話で知らされて、ショックだった」

「昔のことよ」

彼は笑った。

「失恋は人を詩人にするって聞いていたけど、詩人になるどころか毎晩酒を飲み続けて、アル中になりかけたよ」

裕子はカフエラテを全て飲み干した。

「お父さんはどうしてるの」

「父は死んだわ。五年前」

気まずい沈黙。

「お父さんは僕たちの結婚を許してくれるべきだったんだよね。僕が日本人と中国人の間に生れたことなんて、たいしたことではなかったはずだよ」

「私が勇気がなかったの。今なら誰と結婚しようと私の勝手だと父に言えたわ」

裕子はそっぽを向いて言った。

それからしばらく昔の恋人を見て、彼の手に触れた。

彼の心の中から、しゃべりたいことが津波のようにあふれてようとしていた。大学時代に彼女に会って魔法にかかったように彼女のことしか考えられなくなったこと。デイスコでチンピラにからまれて喧嘩沙汰になり、二人でなんとか店から逃げ出し、冬の寒い夜を何時間も歩き回ったときのこと。日本に帰ってきた後、よく二人でいった丘に登って、君がくるかもしれないと、つまらない妄想にふけていたこと。

だが彼は大きく息をついただけだった。

裕子は急に手を離して、腕時計を見た。

「図書館に行くわ」

二人は同時に立ち上がり、彼は慣れてない手つきで裕子のパーカーに手を伸ばすと裕子の背後に回った。

「おしゃれなコートだったら優雅なのにね。大げさなんだから」

微笑しながら、裕子は袖に手を通した。

店を出ると雨はまだ激しく降っていた。

「お会いできてよかったわ」

裕子の声を受けると、彼はもじもじして、小声で言った。

「明日、夕食でもどうだろう」

「今晚にしようよ」

二人は携帯電話の番号を教え合った。

第十二話後半に続く

第十二話「愛はリトルレインなのだ」後半

第十二話「愛はリトルレインなのだ」後半

黄昏どき、激しい雨はもう柔らかな雨にかわっている。

市役所前の大通りの行き交う車も、スモールランプを灯しだした。

裕子は朝のコーヒーショップに足を進めていた。孝夫から待ち合わせの場所として昼ごろに連絡が来ていたのだ。午後七時に会おうと。

（デートに女の子が先に着いていいのかな。ちょっぴり待たせて慌てさせたほうが良いかも）

久しぶりのデートに胸がときめくのを覚えた。

（ダメダメ、落ち着かないと。お互いにいい歳なんだから、でもやっぱり待たせるべきね）

そのまま本屋に入って、コーヒーショップには七時五分に着いた。

彼はもう来ていて、店の前に立っている。

「心配したよ。来ないかと思った」

「ごめんね。仕事の整理がつかなかったの」

「まずは仕事を済ませないとね。仕事が第一。ところで「竜縁」っていう中華料理屋に予約したんだけど。そこは大衆的なものから高級なものまでいろいろあるから、僕をケチと思うなよ」

（相変わらずの中華好きね。出来たらフランス料理店かなにかを期待してたのに。まあ私も好きだし）

「ええ」

裕子は気楽に答えた。

二人は駅前のタクシー乗り場まで無言で歩いたが、ときおり裕子に向けられる彼の視線に気づいていた。

（きつと昔より大きくなつた胸元を気にしているんだわ。少しくらい我慢してね。はずしやすいブラだから）

竜縁はタクシーで十分くらいのところにあり、裕子も何回か前を通つたことがある。店からすぐのところにタクシーの待機場所があつた。

タクシーを降りると彼は竜縁のドアを開けて、ドアマンのように裕子を店に導いた。

にぎやかな声が聞こえる。ウエイトレスが出てきて、予約席は二階でございますと二人の前を階段を上がつていく。

二階は一階のにぎやかさと違って、静かだった。四人くらいが腰掛けられるテーブルが八席ある。上がり口付近のテーブルに一組の男女がいるだけだ。

裕子たちは一番奥の席に座つた。

「あいつらさあ、二万円コースだよ」

竜縁の二階の上がり口付近にいた一組の男女のうち裕子たちを背中に見ている男のほうが言つた。

「人は人でしょ。メタボンはすぐに値段のことを言うんだから。さつきも私がフカヒレ姿煮ラーメンを注文したら、大声で四千元もするのかよつて言つたね。誰もいなかったからよかつたけど、この前は回転寿司屋で私が「トロ」を食べようとしたら、何円だつて言つて、あー六百五十円か、ならいいなつてわめいたでしょ。情けないことしたらだめよ。こんど大声で値段のこと言い出したら、レバー打ちをするからね。わかつた」

裕子たちを見渡せる席に座っているのは桃ちゃんである。

「見てメタボン。ちゃんと男の人が女の人のパーカーを壁にかけてやつてるよ。男の人もコートを脱いでかけて

る」

俺はチラッと振り向いてその動作を確認した。

そういえば桃ちゃんはキツネの毛皮の襟巻きや高そうなブルズンを自分で空いている席にきれいにたたんでおいてたな。俺はユニクロのウインドベレーカーをそのまま着て食事をしている。

「ごめん。俺も桃ちゃんの壁にかけようか。俺も脱ぐわ」「もういいの。せっかくの食事会なんだから、普段通りリラックスしてね。ただ今後のために言っただの。紳士になりなさい。向こうの席の人の背広、オーダーメイドよ。はあ、メタボンと比べたら」

「あのね桃ちゃん、人は外見ではないんだよ。人は心なんだから」

「でも外見も心もしようもなかったら……」

桃ちゃんはそれ以上は言わなかったが、別にいつても俺は傷つかないが、少しくらいは……。桃ちゃんの配慮に感謝しよう。

桃ちゃんは大の酢豚好きで、我が町のあらゆる中華料理屋にいったが、ここ竜縁のが一番うまいということで、今日の食事会の場所になった。カラッとした食感があり、俺も他の店よりうまいと思った。今日、注文したのはまず酢豚。次に蟹玉とさっきのフカヒレ姿煮ラーメン、そして最後に杏仁豆腐とエスプレッソ。いつも一人前しかとらず二人で半分分けをする。もちろんエスプレッソだけは二人前。大体、食事会はいつも二時間くらいだ。食事をする時間より、「だべる」時間の方が長い。

「今日さ、チーム青森が決勝トーナメントに進出したんだよ。準決勝まで行ってるんだ。すごいよね」「フエーッ」

桃ちゃんは連れない返事をする。

「メタボン、そういえば昔、チーム青森の缶バッジをみせたよね。あんなおはじきの化け物みたいなゲームのどこが面白いの。メタボンは眼があまりよくないから、あのでっかい輪っかを見せ続けるテレビが好きなんだろうね」

確かに俺は眼があまりよくなく、ゴルフなどを見ると小さな玉をテレビの画面からみつけるのはかなりの努力を要する。サッカーならいつボールがゴールにはいったかなど、いまだに分からない。見えないのだ。

「さすが、桃ちゃん。そうかも知れない」

「でもシムソンズっていうDVDを貸してくれたよね。あれは面白かった」

「良かった。カーリングってちよつと慣れたらドキドキハラハラなんだけどね。それに解説の小林さんが面白いし。すごく熱い解説なんだ」

「フエーン」

桃ちゃんは相変わらず連れない返事をする。

「メタボン、自分の趣味を人に押し付けたらダメよ」
「そういいながら、笑顔になると力いっぱい俺の足を踏んづけた。」

「桃ちゃんは俺の足に押し付けているよ」

「私はいいの。それより」

桃ちゃんの声が小さくなった。

「向こうのカップル、手を重ねあってる。足もくっついてあってる。二人とも胸がキュンとなってるだろうね」

俺が振り向くと、デザートを食べてる姿しか見えない。
「もうデザートかよ。えらい食べるのが速いな」

「私たちが遅いのよ。女の人顔が見えるけど、じつと男の人を見てる。きつと男の人も。見詰め合ってるんだ。ロマンチック」

「食事をするときには食事に集中だ。見詰めあう暇なんかあるか」

そう言つと、桃ちゃんの眼がいたずら小僧のようになったので、また足を踏まれるかと思つてビビつていると、突然背後で携帯電話が鳴り出した。

また振り向くと、男が立ち上がつてジャケットの内ポケットから携帯を取り出し切つていた。

「最低。マナーモードくらいにしないと。メタボンみたいに誰からもかかつてこないなら仕方ないけど、普通なら。恋人のエ・チ・ケツ・ト。雰囲気壊れなかつたらよいけど」

「それくらいで、壊れるなら、それくらいの愛だろ」

「メタボンは私以外とつきあつたことがないから、わかんないだらうけど、女は雰囲気なの。勉強になつたかな、君」

「はい、先生」

俺が合わせると、桃ちゃんはちよつぴりアゴを上げてうれしそうに笑つた。足は踏まれなかつた。

それからしばらくして、ラブラブの二人は、俺たちの横を通つて、階段を下りていった。

「メタボン、あの二人の後をつけて」

「えっ」

「急いで。近くのタクシー乗り場くらいまでで良いから」
「でも」

「偵察はじめー」

桃ちゃんの号令の下、俺は階段を下りていった。

戻つてくると、桃ちゃんはポツリポツリと窓にあたつてゐる雨を見ていた。

窓に映る桃ちゃんの表情は美しかった。

「どうだった」

俺は座ると報告した。

「男の人だけタクシーに乗って、男の人は名刺みたいなのを渡してた。それをもらうと女の方は歩いてどこかに行ってたよ」

「あとは」

「女の人、「裕子のバカ野郎」ってつぶやいていた」

「やっぱりね」

「やっぱりねって、タクシー乗り場で別れると思ってたの」

「ううん。そこまでは。でも今日は二人きりになる気分になれなかったのよ。あの女の人」

「何で」

桃ちゃんは頬杖をつきながら、

「実はねさつき、女の人を先に行かせて降りただけで、その時に男の人、携帯のメールをちらっとだけ確認してたの。女の方はその姿を見てたの」

とくちびるを震わせながら悔しそうに言った。

「メール見るくらい良いだろ」

「もうメタボンはそれだから、もてないのよ。この人、私の愛や体以上にどんな気がかりがあるのって思ったのよ。あなたに私をさしだそうとしているのに、それより大切などんなことがあるの。私とのセックスより大切なメールって何なのって」

「考えすぎ」

「そうよ考えすぎかもしれないから、メタボンに確認させたのよ」

「何で当たったの」

「女にもプライドはあるの。女にとってのセックスは誇りを持たないと出来ない。男みたいに人生のほんのわず

かの時間のことではないの。人生の大切な部分なの」

俺は桃ちゃんに遠く及びいたってはいないと痛感した。ただ疑問が残った。

「裕子のバカ野郎は」

「自分のプライドが愛の機会を奪わしたから。きっと裕子さんで方なんでしょうね。男の人のこと好きだったんだよ。自分で自分を責めてたの」

「また会うと思う」

「きつとね。女の人から電話するよ。今夜はしなくても俺は感心して桃ちゃんの顔を見つめていた。」

「メタボン、男女の愛って激しい雨の中をくぐり抜けるような厳しいものと思わないでね。今、外で降っている雨のように繊細で優しい心と心の通い合いなの」

俺は、桃ちゃんの話聞きながら、ランディ・クロフォードという女性シンガーの「リトルレイン」という歌を思い出していた。

時には悲しみの歌を聞くと

時には夜明けを待ち続ける

みんなみんな そぼふる小雨が必要な

みんなみんな そぼふる小雨の中を歩きたいの

第十二話終了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9887c/>

マイスイートホーム

2010年10月10日15時52分発行